

<特集>

学びのパネル（パネル・ディスカッション）の記録

はじめに

教員養成センターでは、2014年度後期に「学び・遊び・つくる プロジェクト」（2014年度学長経費（教育・研究改善推進費））を企画実施しました。この企画は2013年度実施の「学びの教室」を発展させたものです。プロジェクトは以下のように、<学び>、<遊び>、<つくる>の3つで展開しました。

<学び>—— 現職教員の方々から、授業づくりやクラスづくりの極意を学ぶこと、教職に就いた後に続く、教員としてのさまざまなキャリア形成のあり方を、指導主事や海外日本人学校教員などの例から描くことを目標として、「学びの教室」および「学びのパネル」（パネル・ディスカッション）を実施。

「学びの教室」（全7回）

第1回 10月28日（火）

講師：松下裕之 鳥取市立美和小学校教諭（鳥取県エキスパート教員/算数・理科）

第2回 10月30日（木）

講師：影井真樹 鳥取市立美保南小学校教諭（元 香港日本人学校教員）

第3回 11月6日（木）

講師：千代西尾祐司 鳥取県教育センター指導主事（指導主事のしごと）

第4回 11月12日（水）

講師：山本正人 前・鳥取市立若葉台小学校校長（授業づくり）

第5回 11月20日（木）

講師：福田美奈 鳥取市立面影小学校教諭

（鳥取県エキスパート教員/学級経営・図画工作）

第6回 12月8日（月）

講師：矢部敦子 鳥取東高等学校教諭（鳥取県エキスパート教員/数学）

第7回 1月8日（木）

講師：河中俊文 鳥取市立湖東中学校教諭（鳥取県エキスパート教員/英語）

「学びのパネル」（全2回）

第1回 12月5日（金）テーマ「海外日本人学校で働く」

（コーディネーター：教員養成センター教員 柿内真紀）

パネリスト：初瀬麻未 八頭町立郡家東小学校教諭（前 ハンブルグ日本人学校教員）

伊藤憲栄 鳥取市立若葉台小学校教諭（元 上海日本人学校教員）

広富隆史 智頭町立智頭小学校教諭（前 マニラ日本人学校教員）

第2回 12月18日（木）テーマ「学級経営の極意」

（コーディネーター：教員養成センター特任教員 小谷健一）

パネリスト：山本美弥子 鳥取市立倉田小学校教諭（鳥取県エキスパート教員）

大広晴美 鳥取市立中ノ郷中学校教諭（鳥取県エキスパート教員）

横田博昭 鳥取市立中ノ郷小学校教諭（鳥取県エキスパート教員）

<遊び>——遊びを通して学ぶことは大切である一方で、遊びきることも大切である。しかしながら、そのバランスを取るのが難しいところであるというスタンスから、遊びを取り入れた授業を学びながら、最後には参加者で遊びを通じた学びを作ることを目標に実施。

「遊びの教室」（全3回）

第1回 11月13日（木）

講師：田村多恵子 鳥取大学附属小学校教諭「言葉遊びを取り入れた授業」

第2回 12月11日（木）

講師：小松亜希恵 三朝町立三朝中学校教諭「ワークショップを取り入れた授業」

第3回 1月15日（木）

講師：大谷直史（教員養成センター教員），読書ゼミナール受講者

「ボードゲームを取り入れた授業」

〈つくる〉——教師になってから不安なのは、授業がしっかりできるかどうかということ。聞いているだけでは自信につながらないこともある。そこで、実際に自分たちで授業を作って、やってみようという試みを実施。

「つくる教室」（全3回）

講師：千代西尾祐司（鳥取県教育センター指導主事・教員養成センター客員教員）

小谷健一（教員養成センター特任教員）

第1回 11月8日（土）

第2回 11月15日（土）

第3回 12月13日（土）

今回の特集では、以上のプロジェクト企画のなかから、「学びのパネル」（パネル・ディスカッション）をとりあげます。

テーマ1 「海外日本人学校で働く」

〔※注：講演は写真を含めたパワーポイント資料をプロジェクターで投影しておこなわれており、写真や地図等を指し示しながらの場面が多いが、文中には特にその箇所を明示していない。〕

（1）パネリスト講演：

初瀬麻未 八頭町立郡家東小学校教諭

（前 ハンブルグ日本人学校教員）



（初瀬）皆さん、こんにちは。

（会場）こんにちは。

（初瀬）はい、ありがとうございます。皆さんが拍手をしてくださったので随分心が軽くなりました。ありがとうございます。私は、八頭町立郡家東小学校に勤めております。現在は5年生の担任をしております。ハンブルグから帰ってまいりまして、2年目になりました。帰って間もないと紹介があったんですけども、皆さん鳥取の冬は過ごされたことがあ

りますか？3月に鳥取に帰国したんですけども、あの暗い空と、どんよりした空気を飛行機の中で感じ、ああ、鳥取に帰ってきたと、現実に引き戻されました。まだ1年半ぐらしか経っていないのに、もうすっかり、夢の世界というか、ハンブルグに行ったらやっぱりいい感じになってしまっているのですが、今回このような機会をいただいて、再び自分の報告するプレゼンを見ることで、また懐かしい気持ちになれた感じです。

15分間の時間をいただきました。小学生を前に15分語り続けるなんていうことはないんですね。そんなことをしたら子どもたち、遠い遠い夢の世界に行ってしまうので。いつも、こう対話をしながらするんですけども、15分間、なんとか耐えてやってください。

まずは自己紹介からということで、私は、広島大学を卒業しまして、山郷小学校、智頭町立山郷小学校なんですけれども、通いました。今は廃校となって、もう学校はありません。はい、悲しい。その後、佐治小学校、郡家西小学校で半年ずつ、そして、湖山西小学校で1年間、講師をしました。ここでは不登校対応教員ということで、学校に行きたくてもなかなか来れない子たちの対応ということで、家庭訪問をして一緒に勉強をしたりとか、学校に来ても教室に入れないうつていう子どもたちと一緒に保健室で学習をしたりとか、そんな1年間を送ることができました。その後採用されて、教員として、鳥取市立若葉台小学校に勤務しました。3年間ここ

におりました。

その後、また、教員生活をスタートすることのできた山郷小学校に戻していただきまして、5年間、ここで勤めさせていただきまして。山郷小学校は全校児童がだいたい20人位で、教諭と呼ばれる先生が4人、あとは講師の先生がおふたりいらっしゃいました。ですので、ひとりあたりが担当する分野がすごく多くて、分掌と言うんですけれども、それがすごく多くて、本当にいろんな経験をこの学校でさせていただきまして。「人数少ないと楽でしょう」ってよく言われるんですけど、図工主任、国語主任、道徳主任、みんなそれぞれの教科に主任がつくんですけれども、なにせ小さい学校はひとりが何個も掛け持ちをして、その教科をまわすためにいろいろと提案をしたりします。

この山郷小学校でいろんな経験をさせていただいて、そろそろ、海外に出てもいいかなと思えるようになったので、ここで受験をさせていただきました。一度、若葉台小学校にいるときに、チャレンジをしようとしたんですけれども、鳥取の場合は、「経験をしっかり積んで、現地で力が発揮できるようになってから試験を受けてください」というようなことがありまして、山郷で、いつかな、いつかなと思いつつ過ぎていて、そろそろいいかなということで受験をさせていただきました。

前回(「学びの教室」第2回)の影井先生のお話で聞かれたかもしれませんが、日本人学校は自分で行きたい学校を選ぶわけじゃあないんですね。ガラガラガラーポーンって出た学校に「行ってください」と言われ、「はい」と返事をする人しか採用はされないんですけど、そこで、私はハンブルグ日本人学校に行かせていただくことになりました。私はビールが大好きなんですけれども、「えっ、いいんですか、ドイツで!」と、校長先生にお話をしたのを今でも覚えています。

在外教育施設を目指した経緯ということですが、私は、鳥取県人でも、あの、「けっこう田舎だよな」と言ってくれる智頭町に住んでいます。生まれも育ちも智頭町です。智頭は杉の町で有名なんですけれども、カナダの杉と智頭の杉で交流をしようということで、当時、まちおこしがありました。智頭の高校生と、それからカナダの高校生を1ヶ月交換して、生活をさせようというそんな交流があったんですけれども、そういう機会をいただいて、カナダに行かせていただきました。それからあと、ずいぶん外国との関わりが自分の身近なものになっていって、常に外国を感じながら生活することができました。

その後なんですけれども、湖山西小学校に勤めた時に、メキシコからお帰りになられた、日本人学校に勤められた先生と出会うことができました。帰ってきた後ってね、もうなんかすごく、新鮮なんですよ。いろんなことを伝えたいと思ってくださっていて、それを伝えられたのが自分だったかなと思っています。その後、若葉台小学校に行きました。なん

と、ハンブルグ日本人学校から帰国された先生と、ここで出会うことができました。この先生からもたっぷり、ハンブルグの魅力を知っていました。まさか、自分がハンブルグに行くなんてことはその時は思ってもみなかったんですけども、あの時教えていただいたことが、本当に、自分の、この、手の中に入って実現したっていうのが本当に大きな喜びでした。

先程もお話しましたが、その後、山郷小学校で本当にたくさんの方を担当させていただいて、研究主任であったりとか、特別支援教育主任であったりとか。あと、図書館司書の資格も持っていましたので、司書教諭として子どもたちと関わらせてもらった、そんな経験を生かしてきました。そして何より難しかったのは、県の試験でも、文部科学省の試験でもなく、夫の許可をもらうことだったんですね。在外に行く条件として、配偶者が随伴しなければならないという決まりがありました。他県ではもう随伴はしなくてもいいということになっていましたが、鳥取は、ちょっとこの間までは、随伴してくださいというようなことで、そういう決まりがあって、夫にお仕事を休んでもらって、または辞めてもらって、「行ってもいい〜い?」って相談をして、夫が「いいよ」と言ってくれたので、私の夢を叶えることができました。

あと、子どもの進学のこともちょっと気になっていたりして、日本人学校には中学部しかありませんので、あまり大きくなってから行くことと進学のことでいろいろと考えることが増えていったりとか。あと、6年生とか、中学生になってくると自分の友達、とっても仲の良い友達と、離れななきゃいけないっていう、そういう辛さも出てくるんですね。そういうことも考えたりしながら、まあ小さいうちがいいかなという感覚をもっていましたので、そろそろかなと思いつつ、受験をさせていただきました。

大学生の頃、自分が目指していたことなんですけど、小学校の先生になりたいと思って広島大学の教員養成課程を受けましたので、素敵な先生になりたいなあと思っていました。今も、思い、思い続けています。それから、もっと自分の世界を広げたいなあと思っていました。智頭の空を見上げてみると、「ね、広富先生(パネリストのひとり)で智頭小学校勤務)。空って狭いんですよー」。本当に山に囲まれているので、狭い世界で生きていたなあということを感じていたんですが、ほんとに、人間関係もそうだし、あと、住んでいる人の幅も、わりと、こう狭まった世界の中で生きてきたので、いろんな人と関わって、世界を広げていきたいなあ、ということを感じながら大学生活を過ごしていたと思います。それで、私が入ったサークルが2つありまして、1つは「熱気球サークル有頂天」というのに入りました。広島市の西条というところだったんですけれども、田んぼがたくさんありました。そこで、冬、稲を刈った後、気球を上げたりしていました。あと、佐賀で、バルーンフェスタという世界大会があるんですが、その所に出かけたりして、ボランティアで、外国からパイロッ

トさんだけがやってきて、気球は佐賀のものを貸して、それを1個手伝うというようなことをしたりとか。あとボランティアもしていました。障害のある子たちが通ってくる園があったんですけど、そこに毎週通って、子どもたちに、活動を企画したりしながら過ごしていました。そこは、保育園の子から社会人の方までいらっちゃって、それぞれの年齢に合う活動を組んで、ボランティアとしてしていましたが、一緒に楽しんでたような感じです。下の方の写真、ちょっと見にくいんですけど、あれはカーブ、広島カーブを応援に行っていて、わいわい騒いでいる様子の写真です。あと、自分になにかできることはないかなあいつも模索していたような気がします。

では、勤務した日本人学校についてお話をします。ハンブルグというのは、ドイツの中でも北の方になるんですけども、北の方ですので、夏はずいぶん遅くまで日（太陽）が昇っていました。12時ぐらいになってもまだ明るいんですよ。で、子どもたちによく、「暗くなったから寝んさいよー」なんて言ったら、いつまでたっても寝ませんので、「もう8時だけえ、寝んさい」と、カーテンを開けて暮らしていました。夜、冬なんかはもう智頭と同じ感じで、4時ぐらいになるともう真っ暗になってくるっていう、そんな環境だったので、私にしては、順応しやすい環境だったかなあというふうに思います。人によってはずいぶん辛い思いをされていました。

ハンブルグ日本人学校って書いたんですが、実はハンブルグ日本人学校、ハンブルグにはありません。「えーっ!?!」って感じなんですけど、ハンブルグ州はこの部分なんですけど、すぐ上のこのシュレスビヒ=ホルスタイン州に、ほんとに、境の部分に学校がありました。元々はハンブルグにあったんですけども、街の中でとても土地が高かったので、広い場所で子どもたちに教育をさせたいということで、ほんとに境目の辺りのシュレスビヒ=ホルスタイン州に学校を建てましたので、ちょっとカラクリがありました。

ハンブルグ日本人学校です。幼稚部30名、小学部60名、中学部14名ということで、合計104人、小規模の学校でした。在外派遣教員が11人で、その他に7人の先生がいらっしゃいました。この先生方は現地で採用されて、学校は私立ですので、保護者様から集めたお金を使って先生方にお給料が支払われていました。内訳（在外派遣教員11人、現地採用職員7人〔幼稚園2人、英語・ドイツ語教師3人、総務1人、事務長1人〕）は前のとおりです。

学校の特色は先程もお話しました、企業および個人の支援によって設立されています。幼稚園児、小学部児童、中学部生徒合わせて104人、4歳から15歳までの子どもたちが、同じ校舎に一堂に会して行事を行っていました。中学生ぐらいになるとね、ちょっと反抗したくなってくるんですけど、すぐ隣で、幼稚園の子たちが「わー、お兄ちゃん」、とか言うてるので、そんなことをしてらんないって感じの学校の雰

囲気でした。国際感覚を身につけた子どもたちを育てるという観点で外国語教育、ドイツ語と英語を充実させていました。7校時、勉強をしていました。それでドイツ語2時間と英語。英語は3年生以上、ドイツ語は1年生から学習をしていました。

現地での生活のお仕事編ということで簡単に説明したいと思います。1年目は3年生を担当させていただきました。（ハンブルグに）行って、2日後に学校が始まりましたので、飛行機で着いて1日寝て、そしたら次の日もう朝から出勤で、お便り書いて、パスポートのなんかをしに行っていて、もう次の日は学校、なんていう感じで。時差ボケの中えらいことでしたが、やりました。これは街探検なんですね、3年生の社会の学習。スタートは街探検で、子どもたちの方が街はよく知っているんですが、そこどころも、他の先生方に色々聞きながら、子どもたちを連れて、市場に出かけてお買い物をする、あと、街の様子を見る、発見する、なんていう活動をすぐにさせていただきました。1年間かけて地域を知る学習がありましたので、私自身も行って間もなかったのですが、子どもたちと一緒に、いろんな学びをすることができました。ハンブルグはわりと涼しいところですので、りんごも育てられていて、りんご園の農家の方にお話を聞いたりしました。打ち合わせも全部自分でしなきゃいけないくて、片言のドイツ語と英語を使いながら、本当に今日これで大丈夫かなあと不安に思いながら、校外学習に行ったのを覚えています。

2年目は6年生を担当しました。修学旅行はベルリンの方に行きました。総合的な学習ということで、ノイエンガンベ収容所というところがあったんですが、ユダヤ人の方が収容されて、労働させられていたというような場所も近くにありましたので、子どもたちと一緒に学びをしていきました。

3年目は、中学1年生を担当させていただきました。というのは、私は中学校・高校の国語の免許も持っていましたので、向こうに行ったら中学部の国語の授業にも出なければいけません。それで、中3と中1の国語を担当したんですけども、そんな関係で中学部も担任をしてくれ、ということで、最後は中学部の担任を勤めさせていただきました。修学旅行は3年生で行きます。現地校の交流をしたりとか、あと、総合的な学習、職場体験、実際にドイツの企業とか、お店の中に向いて体験をさせてもらうようなことを一緒にさせていただきました。

私は学校図書館というのを少し変えたいなあって、日本人学校に行きましたので、ほんとに日本語に触れる機会が少ない子どもたちのために何かできないかなあということで、できるだけ良い本を多くの子どものために、調べ学習ができるような環境を整えたい、幅広い年代に対応できるように本を揃えたい、使いやすく親しみやすい図書館にしたいということで、取り組みました。分類を大きくしたりとか、中学年の子どもたちへのコーナーを作ったりとか、選書日記をつけた

りしながらやっていました。読書週間もやりました。日本の学校でよくやっているような読み聞かせとかクイズ大会とかビンゴとか、そんなのをやっていました。あと6年生をもった時なのですけれども、最高学年がこの学校、9年生なんです。で、小学生の6年生の時ってぐーんと成長する時期なんですけれども、そういう時期がないってことがちょっと残念で、6年生に活躍の場をつくりたいということで、小学部の活動を充実させようと先生たちに投げかけて、縦割り班活動というのを積極的に取り入れました。お弁当を月に2回一緒に食べて、その後遊ぶっていう、そんな簡単なものだったんですが、子どもたちのつながりが少しずつ増えていったかなあということを思います。

私的編ということで、ドイツといえば、エコの国。いろんな工夫がありました。スーパーに売ってある、普通のスーパーなんですけど、包装はほとんどされていません。必要なものをグラムで、秤があるんですけど、この秤に乗せて、必要な分だけ持ち帰る。下の方はチーズです。300種類ぐらいあるっていうふうに言われていました。あと真ん中の物なんですけど、これ、子どもがすごく喜びました。あの中に、空いたカラのペットボトルを入れ込むと、25セント戻ってくるんですよ。4本あれば1ユーロなんです。そうすると、1ユーロあれば、ほんとにいろんな物が買えちゃうんですけど、子どもたちはそれに驚いていました。でもカラクリがありまして、お買い物をする時に、そのペットボトル代、ジュースが100円なら、25円の容器代を足してお金を払っていることになっているので、ほんとに自分が払ったお金が戻ってくるっていう感覚なんですけど、確実に回収しようとするドイツの取り組みで、こういう機械が至る所のスーパーに置いてありました。あと、町中にリサイクルボックスを用意していて、いつでも、ダンボールが捨てられる、ビンが捨てられる。そういう状況があったので回収率も高かったんだなあと思いました。

これからクリスマスの時期があるんですが、クリスマスは、大抵、生木を飾るんですね。1月を過ぎてくると、こんなふうに回収日があって、道の歩道とかにモミの木がドサーッと投げられて、これを車が回収していくなっていうおもしろい光景も見ました。エコ、なんですけど、太陽光発電、あと風力発電、菜の花畑。実はバイオディーゼルを採るために、2年も続けて使ってしまった畑に菜の花を植えて、油を採る。畑にとっても油が入るので、すごくいいっていうふうに言われていました。春になるとこの風景が見られるっていうのは、ほんとに、住んでる人にとっては、美しいまた春がやってきたなあと感じさせる、心の栄養になる、そんな風景でした。風力発電の方もね、ほんとにいたるところに発電機が建っていました。

ドイツといえば余暇を楽しむ国ということで、仕事帰りにオペラに行ったり、サッカーの観戦に行ったりというのはも

う普通で、芸術、ドイツはすごく大事にしている国だと思うんですけど、小さな子どもたちがオペラを楽しむような、そんな施設もたくさんありました。あと、右奥の方はクリスマスマーケット、クリスマスマルクトと呼ばれる時期で、この時期になるとほんとにたくさんのお店が出て、たくさんの人が集まって、たくさんのお酒を飲んでいる、というような状況が見られます。下が、行った年にワールドカップがあったんですが、街中にこんな大きなパブリック・ビューイングが設置されて、皆が集まって、ここでも皆、ビール片手にサッカー観戦。いつでもビールが近くにある、そんな国でした。

サッカーの国ということで、左側に写っているのは長谷部(選手)、下に写っているのは乾(選手)です。家から30分ぐらいのところにはブンデスリーガのサッカー場がありましたので、そこに来てくれていました。日本人が出るとなると、チケットを取って応援に行きます。チケットも1000円位から、高くても5000円くらい払えば席が取れますので行きました。一番下の男の子(息子)、サッカーが大好きなんですけど、一生懸命応援してたら、乾選手が近づいてきてくれて、自分の着ていたユニフォームを手渡してくれたんです。そしたら、みんなが喜んで、同僚なんですけど、もう皆が「一緒に写真撮るー！」って大興奮した、3年目にそんなプレゼントを乾選手がくれました。ビールの国ということで、いたるところでビールを飲みました。これは、学校の行事でファッシング(Fasching)というのがあるんですが、謝肉祭ということで、しばらく肉を断って冬の間過ごすんですけど、それが終わる頃になると皆が変装して、街中がカーニバル。これ、学校の職員なんです。全部ね。この格好のまま普通に授業をします。子どもたちもこういう格好でやってきていますので、おかしな感じ。楽しかったです。はい、ご清聴ありがとうございました。

(会場) (拍手)

(2) パネリスト講演：

伊藤憲栄 鳥取市立若葉台小学校教諭



(元 上海日本人学校教員)

(伊藤) はい、前出ていいですか。皆さんこんにちは！

(会場) こんにちは！

（伊藤）もう大体じっとしていられないのでちょっとね、ひとつ協力してください。僕ね、右手を上げますので、ちょっと拍手して、拍手！さっき上手な拍手してましたね。よっ！

（会場）（拍手の音。この後、伊藤教諭と会場との間で体を動かしてのコミュニケーションが続き、その後、講演が始まる。）

（伊藤）すみません。貴重な時間を1分もこんなことに使ってしまった。それでは、したいと思います。私はですね、細かいことは言えませんが、大学時代、この鳥大出身じゃないんです。岡山の方の大学出身なんです。学生時代はボランティア活動をたくさんしてました。今なんかのゲームしたりとかね、キャンプに連れて行くっていうような活動をいっぱいやってたのと、海外に出かけて行って、水道作ったりとかね、学校の支援をするとかね、そんな活動をしていました。長いこと県外にいたんですけども、県外にいながらボランティアをしたり、なんかね、動物園を手伝ったりとか、牧場を手伝ったりとか、アホなことをいっぱいしたなかで、まあ最後に鳥取に帰ってくるかなあとと思って、その時に働き口としてまあ教員をしようかなという。ちょっとすみません、こんないいかげんなかたちで教員になりました。教員をして、講師の段階で5校ぐらい。宝木小学校とか、倉田小学校とか若桜小学校とかいろいろまわりました。その後、採用されて、用瀬小学校、城北小学校。それで、この4月からは若葉台小学校の方にかわってきました。

私がなぜ海外日本人学校に希望したかという、もともと海外で働いてということ自体が夢でした。それで、是非行ってみたいなあっていうのが一番の理由です。で、ほんとは、青年海外協力隊でありますよね、あのJICAの事業。青年海外協力隊の方で行くと、もっとなんかこう、サバイバル的な生活ができるんじゃないかとかって思って、そっちを希望したんですが、そちらはね、日本人学校とは逆で、単身じゃないといけないんです。ひとりじゃないといけないんです。それを家族に話したところ、「だめだ」と言われて。海外行くんだったら、家族だろう、みたい。うちのかみさん、なんか僕よりもっとパワフルなんです。で、子ども何人でも抱えて海外行くよって感じだったので。ほんとにちっちゃい子ども、1歳になったばかりの子どもを抱えてね、家族5人で日本人学校に行くことになりました。

まあそんなんで、おちゃらけて言っていますが、皆さんも教育のこといっぱい勉強しておられると思いますが、日本のね、教育ってすごい優れたところがいっぱいあるんです。そのうちの原則の1つが教育の機会均等。日本人であれば、どの子であっても教育を受ける権利は保障されているという、素晴らしい原則があつて。まあ、病気があろうと、重たい障がいがあろうと、どんな子でも勉強できるよって。それが地球の裏側に住んでいようと、海外にいようと、日本の勉強ができるよってという制度があるっていうことを聞いて、ああすごいことだなあと思いました。

上海にね、日本人どれくらいいるか知ってます？10万人です。すよ、10万人。鳥取県民の6分の1ぐらいの人が、上海に、日本人がいるんですよ。で、そのうちの5万人ぐらいが6ヶ月以上滞在している。家族を連れて生活している。企業戦士ですよ。企業の駐在員さんね。企業に勤めている人たちが、日本のため、日本の企業のために一生懸命、海外に出かけて行って働いているんですが、PM2.5にも負けず。その企業戦士さんの方はいいんですけど、その子どもさんたちね。かわいい子どもさんたちは、たぶん自分で望んで上海にいるわけじゃないんです。そうですね。お父さんやお母さんが行くから、まあ、たぶん我慢してついてきてるんです。わが子も上海に行く時には泣きましたよ。「なんでえーおとうちゃんが行かないの？」とかねえ。俺の夢のためだとは言えずにね、まあ、一緒に行ったんですが。で、その海外に行く子どもたちが海外に出て、日本語で授業ができて、日本のことが学べて、そういう日本人学校があるってのはすごいことだなあっていうふうにならなかつた。それで、何かね、僕自身も力になれんかなあと、こんないい加減な人間なんですけど、そんなふうにして、日本人学校を希望しました。はい、そんな感じですね。大学の頃から、まあ教員になろうっていう思いもありました。もう一方でボランティア方面でも、なんか人と関わることが好きなんです。なんか人にどんどん関わるとか、そういう活動をしていきたいなあっていうのをずっと思っていて、まあ先程言った通り、ぎりぎりまで悩みながら、教員になったような人間です。

では早速、上海日本人学校虹橋校の話をしていきます。タイトルに「上海日本人学校虹橋校と高度経済成長をする上海」と書きました。ちょっとは上海のことについても触れたいなあと思っています。私が上海日本人学校に勤めていたのが、2009年から2011年です。読みにくいですね。上海日本人学校までは読めますよね。その後「虹橋校」と書いてありますが、中国語で「ホンチャオ」。「ホンチャオコウ」っていうふうに読みます。「シャンハイニホンジンガッコウホンチャオコウ」と読みます。虹の橋って素敵でしょう？なんか決まった瞬間、「へええー、虹の橋かっこええっ」とか思ってね、なんか中国と日本の虹の架け橋になりそうなんて、かっこいいことを言って出かけたのを覚えています。

はい、こっちが東校舎。5階建ての校舎が建っています。何枚か写真見せます。1年生のお絵かきの様子です。行ったばかり、行った1年目と2年目は僕は1年生担任でした。かわいい1年生担任、踏みつけないように気をつけながら歩いていました。かわいかったです。お弁当。日本人学校では毎日お弁当でした。給食がありません。子どもたちは嬉しいんですけども、お家の人は大変です。毎日お弁当を作らなきゃいけませんから。なかにはお手伝いさんが作ってくださるおいしそうなお弁当。現地のね、中華風のお弁当とか、あったりもします。「さようなら」って書いてありますが、上海日本人学

校の子どもたち、60台のバスで行き来してました。マンションから敷地内までバスで送迎です。日本みたいだね、集団登校とかね、街中を歩くことはありません。帰る時には60台全部に、全部の子どもが乗ったかどうかを確認して、「ちゃんとおるかいなあ」って確認して、全員が揃った時点で「はい、オッケー」みたいな、「はい、帰りましょう」って一斉にバスを出す。壮観ですよ。60台のバスが一気に出ていく瞬間。はい、全員で見送ってました。この端っこにいるのは校長先生です。校長先生も見送っています。

上海日本人学校は、ホンチャオ(虹橋)校とブートン(浦東)校って2つあります。で、どちらの学校も児童は1500人ずつ。先程100人というのがありましたが、1500人。僕もこんな規模の学校勤めたことはありませんでした。学級数は約50学級。1つの学校に。小学生だけです。1年生から6年生まで、50学級。1年生は1組から10組まであってですね。ああなんか10組の担任の先生とかやってみたいなあ、とかって言ってたんですけど、はい、なれませんでした。

上海の場所をご存知ですね。だいたい鹿児島と同じぐらいの緯度になります。こんなねえ、怪物の顔みたいな形をした上海市なんですけど、その中心地の中で、川の東側にブートン校。このホンチャオ空港とか、上海総領事館の近いところにホンチャオ校が建っていました。これ、なんか地図で見ると近そうに見えますがだいたい100キロぐらい離れています。鳥取から米子ぐらい離れています。こっちは上海総領事館が近いので日本人が住んでいるところがたくさんあって、街中歩いててもなんか日本語が聞こえてくるというね。看板、カタカナで「マッサージ」とかね。「ビデオショップ」とかね。微妙に「シ」と「ツ」を書き間違えられて「ビデオツヨシ」とか書いてあったりするんですけども。そんな感じでした。日本人はとても多かったです。

上海日本人学校、教職員約60名。その他の現地スタッフ、英語講師、中国語講師、事務職員、プールの管理人や清掃員、修繕管理スタッフ、庭師、門衛・ガードマン、(会場の投影画面では以上に加えて、保健室養護教員)。(教職員と)合わせると100名ぐらいいます。日本語が喋れないスタッフもたくさんいます。

まずは運動会、運動会が大変です。1500人児童がいますから、保護者制限かけるんですよ。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんまでしかだめですよ、親戚のおじちゃんを連れてきちゃだめですよ、とかって言うんですが、それでも3000人の保護者が集まるので、なんと5000人集まるんです。とんでもないです。昔はね、陸上競技場を借りてやってみたくて、私が行った年から、学校でやってみるようになりました。児童集会も1500人ですよ。びっくりしました。で、運動会をやるにあたって、「ほんとに運動会できるんかい、弁当食べるんか校庭で」と思って、とりあえず、ある日、並べてみました、子どもたち。1500人、「はい、並ん

で」みたいな。「あ、食べれたね、なんとか運動会いけそうだね」みたいなね。こんな状態で食べたくないですね、弁当ね。で、運動会当日、なんと見事にできました。これ、5年生がソーラン節。1つの学年が200人以上いるので、何をやってても壮観です。これが揃うと壮観です。

児童集会の様子です。集会って、集会、ほんとの集会っぽいですね。入る場所がないから、足を、前の子の体と体の間に入れて座ってるんですよ。もう、1回座ったら身動き取れません。

語学に力を入れていました。中国語は週に1回、初級中級上級のクラス分け。私の息子が3年間ずっと初級だったのがいまだに解せないんですけども。英語活動も週に1回、1年生から。ALTさんが入って、少人数指導。15人ずつぐらい担当して、みました。保護者がね、我々よりももちろん、英語も中国語も堪能でね。語学参観日が毎回あるんですが、その度に私は緊張。なんか発音まちがってるの、ばれてるだろうなあとかって思いながらしてました。研究授業もしていました。中国語の様子です。中国語喋ってるんです。バナナってなんていうかもう忘れちゃいましたけど。英語活動もしています。あなたはトマトが好きですかみたいなこと言ってるんでしょうねえ。これね、スマホ持たせてるわけじゃなくてね、なんか海外で、英語で電話をやり取りしているという設定でやっています。こんなに目の前に見えてますが、離れているという設定でやっています。

国際理解教育にも力を入れていまして、チャレンジタイムっていうので、中国文化を体験するようなことをしました。中国影絵、カンフー、京劇、上海雑技、などをしてました。これは1年生のチャレンジタイム。中国影絵とか、影絵を実際に動かしてみたりとか。6年生のチャレンジタイム。中国花文字とかってのを書いたりしました。卒業式の日に僕がもらったので持ってきました、これ(会場で披露)。学級に掲示してました。皆で「なんて文字にする？」って言ったらね、「一生懸命」。「一生懸命」の「生」をね、「一緒に頑張ろうにしよーでー」とかって子どもたちの発案で「一緒懸命」。卒業の時にね、「先生にどうぞ」って言ってもらったんで、喜んで持って帰りました。これ、花文字といえます。獅子舞があったり、カンフーしたり、雑技をしたりしました。現地校との交流もしました。毎年毎年、現地の小学校の子が来て、交流をしました。一緒にハンカチ落としをします。現地の子とハンカチ落とし。中国語で喋ってるんでしょうね。剣玉を教えてあげてます。これ、小学校1年生の子がなんとか片言の中国語で教えています。

それ以外に、ちょうど私たちがいた頃に、不幸なことなんですけど、東日本大震災がありました。11年にありました。で、その時にね、大変我々としてはもどかしかったんです。何かしたい、何かお手伝いしたい、現地にでも行きたい、でも動けない、という思いを我々も抱えていました。東北出身の教

員もいます。子どもたちも同じように、東北出身の子どもたちもいます。おじいちゃんおばあちゃんのことが心配、けど何もできない。むしろ、東北に入るわけにはいかないので、上海にいなければいけない。そんな中で子どもたちと話してなんとか日本を応援する活動がしたいなあっていうので、頑張れ日本キャンペーンとかってことをしました。募金活動で募ったり。113万円集まりました。それから折鶴折ったり。運動会のテーマも「届けよう虹橋魂！」で、(特別活動で)「がんばろう日本！」の応援エールを送ろうっていうようなことで、しました。海外にいるからこそ、なんか自分たちは日本が好きなんだなあっていうことを感じた瞬間だったと思います。

では上海の様子ということで、上海万博がありました。2010年です。日本館ですね。で、それに向けてどんどんどん、街がね、良くなっていくんです。地下鉄が増えたりとか、リアモーターカーが、まあ元々あったんですが、リアモーターカーがあったりとか、変わっていきました。リアモーターカーです。時速400キロで走ります。すごく速かったです。でも(運賃が)高いので、私たちもお客さんが来た時にしか乗らないです。古い街並みはどんどん新しいマンションになっていきました。上海は、最先端をいく都市でありながら、古き良き時代のね、こういう塔とかも。これ、三国志の孫権が建てた龍華寺、ロンハースー(龍華寺)というお寺の塔です。(そういうのも)混ざってたり。西洋文化もあれば東洋文化もあるというおもしろい街でした。

上海はあのPISA、国際調査PISAが1位というのがずっと続いているんですが、それも知りたくて、現地の学校にも行きました。幼稚園年長から、英語活動をずっとやってるそうです。図工とか、そういう学習もバイリンガルで、英語で図工を教えるというような教科をしていました。でもその裏側があって、PISA1位の理由は、家庭学習がなんと小学生から5時間ぐらいあるという、毎日宿題が5時間ぐらいあるんですよ。確かに店番してる子どもたちが、なんかノート広げずっと勉強しているんです。上海の教育委員会の人も話したんですが、「気持ち悪くないですか」って言ったら、上海の教育委員会の人も「これじゃだめだと思っただけだなあ」とかって言っておられました。活用力とかなんとかじゃなくて、もう、詰め込みがPISA1位につながってんだと思ってびっくりしました。「体積」の学習は小学校2年生から始めてました。で、なんと、体育、僕、体育が専門なんですけど、(上海市の学校では)「体育」の授業ほとんどしてないんです。なんか体操服とかもなく、もこもこのダウンジャケットを着て、なんかでんぐり返しをする、みたいな感じで。聞いてみると、けがをさせちゃいけないから体育はしないと。日本の組立体操とかとんでもないと言っておられました。でも(子どもたちは)とっても愛されていました。

工場、これ、シャープなんです。工場見学の様子。機械じ

やなくて人が並んでるんですね。で、人件費が安い。でも段々高くなっていますね、今ね。技術も高くて、市場も大きいということ。で、課題としては、格差が大きい。貧富の格差、教育の格差、地域の格差、なんかがあります。これは現地の人とも交流して、仲良しになったお友達です。現地の人で、3年目の正月はその人の家で過ごさせてもらいました。なんと結婚式にも参加させてもらいました。誰の結婚式かよくわからないけど参加させてもらって、お酒をたくさんいただきました。

ちょっと最後に、もう(時間が)オーバーしてるんですけど紹介させてもらいたい。先程言った、3年間初級だったうちの息子です。手前味噌な話なんですけど、新聞に載ったんですよ、エッセイコンテストに載った、作文が。それをちょっとだけ読ませてください。ちょっと(時間が)オーバーしますが読みます。「そのとき、バスにのっているおばあさんがせきを立ち、ぼくのおかあさんに、すわっていいよとあいずしてくれました。ぼくのおかあさんは、いつも1さいのおとうとをだいています。そのとき、ぼくのおとうとのまさみちがまっさきにすわりました。すぐにべつのおじちゃんがせきを立ち、こえをかけてきました。こんど、ぼくがすわりました。またべつの女の人がせきをゆずってくれました。つぎは、おとうとをだしているおかあさんがすわりました。おかあさんやぼくたちは、『シエシエ。』とお礼をいいました。バスの中はみんな、にこにこしていました。」ちょっと省略して。「上海のバスでは、このようによくせきをゆずってもらいます。まんいんのバスでも、ずっと立っていたことはありません。それからよく話しかけられます。やさしい人が、おおいのだろうと思います。ぼくも大人になったら、中国の人のように、せきをゆずれる大人になりたいです。」って書いて、なんか新聞に載ったんですけど、なかなか聞かないでしょ。中国の人のように席を、中国の人のような優しい大人になりたいっていう一言。でも、実際上海で暮らしてきたうちの息子たちはそういうふうを感じてるんです。優しい人たちだなあっていうのを感じてるんです。こんなはやっぱり現地に入ってみないとわからないのかなあっていうふうに思います。タクシートの運転手さんとすごく仲良くなって、すごく声をかけてくれていました。優しくしてくださる人がいっぱいいました。なんか中国の人っていったらなんか騙してくるんだろう、とかね、けんかを売ってくるんだろう、と思われるかもしれないんですけど。私を感じたのは、日本人っていうのはすごく礼儀正しいなと感じて帰りました。それと、上海の人達はすごく心優しいんだなあっていうのを感じて帰りました。ほんとに、日本と上海をつなぐ虹の架け橋をこれからも育ていきたいなと思いました。ありがとうございました。

(会場) (拍手)

(3) パネリスト講演：

広富隆史 智頭町立智頭小学校教諭

(前 マニラ日本人学校教員)



(広富)はい、皆さん、こんにちは。

(会場) こんにちは。

(広富) 智頭町立智頭小学校の「ひろとみたかし」といいます。よろしくお祈りします。(時間がおしているの)でどんどん、いきたいと思います。伊藤先生とは一緒に、同じ年度に派遣をされました。その時6人でしたかねえ、その年に。鳥取県からは6人。6人海外に、それぞれの国に行きました。その年に(東京の)代々木だったかな、オリンピックセンターで、全国からその年に海外の在外に行く派遣者が集まった時があります。4月に行きますから、1月頃に集まったんですけど、その時に550人ぐらい、一度に、全国から集まりました。つまり、全世界にそれだけの、年間、人材が世界の日本人学校に行くという形になります。私は3年間、行かせていただきました。伊藤先生は同じ年度ですし、初瀬先生はその次の年に、鳥取県から派遣されました。

私は智頭にずーっと通っています。10何年間、智頭の小学校に通っていて、そこにぼつーんと3年間マニラに出たんですけど。家は、湖山、鳥商前で(鳥取大学の)すぐ近くです。歩いて来れるぐらい。で、以前あの、まあ、これを話すともた話が長くなるんですけど、空港から布勢にずーんと道路があります。国道道路が。でも、僕が子どもの頃にはなくてですね。今、真っ直ぐ道ができていますけども、前は真っ直ぐはなかったんですね。なので、私、湖山小学校(出身)なんですけども、家を出て、大学の正門を見て、湖山小学校に通っていました。なので、将来ここには行かないかなあとかね、思ったりもしました。ただ、あの空き地代わりに、もうちっちゃい頃からもう、鳥大はほんとに楽しい場所で、声かけたら大学のお兄さんが相手をしてくれてとかって、もうちっちゃい頃から鳥大は、ほんとに馴染みの場所です。毎日湖山から通っているという状態です。体操をしていましたので、体操部にはもう高校時代なんか鳥大の体操部とかに行っていましたね、一緒に練習させてもらったりしたこともあります。

県外(出身)の方おられますか? 県外、多いですね。私も県外の大学にいました。群馬の方の大学にいました。群馬の方っておられますか? それは、いないですね。あの、星野

富弘さんってご存知ですかね。体操で、頸椎を損傷して、口で絵と文字を書いて詩集をよく出しているという。その方と同じ学校というか、体操部の後輩にあたります。経歴ですけど、経歴といいますが、群馬でちょっと長くいて、小学校の教員をやりたいと。それで、まあ、特に体育が好きで、今、小学校の免許と体育の中学校、高校の免許を持っていますが、将来は小学校の教員がいいなあと思っていたので、小学校を教えるスポーツクラブっていうのが群馬県にあつて、その指導員をちょっとしたり、あと、短大の講師とかもちょっとさせてもらいました。今年夏に健大高崎っていう高校が甲子園に出たと思いますけど、その前身になる群馬女子短大というところで非常勤をしたりとか、前橋工科大学とかっていうところでちょっとだけ体育を教えたりしました。そして、帰ってきて17年目になります。だいたい高学年をもたせてもらっています。そういう経歴です。

在外を目指した経緯ですけども、教員になろうっていうのはもう前から夢で思っていました。特に小学校教員になりたいなあと思っていました。海外にいずれは行ってみたいというか、経験をしたっていうのは漠然と憧れはあったんですけども。2003年に、たまたまですけどアメリカに行く機会がありました。若手教員の米国派遣という企画があつて、3ヶ月、行くチャンスがあつて、そこでホームステイしたりとか、オレゴン州だったんですけども、オレゴン州の公立の大学に行って、日本の文化を紹介したりとかしてきました。それで、もう、現実味を帯びてきたというか、絶対行こうということ。ただ日々の教員生活、とっても忙しいので。えー、忙しいですよ。忙しいけども。まあ仕事はどんな仕事でも、楽な仕事はないと思いますので、どうせやるならしんどくてもというか、忙しくてもやり通せる仕事に出会えたらいいかなあ。皆さんも出会えたらいいかなあっていうふう思うんですけども。まあとっても、忙しい、忙しいので、いつ行くのかっていうね、在外にいつ行くのかっていうのが、きっかけがなかなかつかめなかったんですけども、10年目を過ぎて、よし行こう、ということで行くことになりました。

フィリピンを紹介したいと思います。国旗もあります。日本からまあ4時間、ないしは4時間半。意外と行き来が多くて、よく、あの、日本人とフィリピン人で結婚されている方も多くて、行き来はとってもあるので、便数はいっぱいあります。飛行機の便はいっぱいあります。人口は9400万。日本の8割ぐらいの広さで、島の数は7000以上あります。キリスト教徒、ですから教会もいっぱいあります。在留邦人が1万7702人とあります。いっぱい日本人はいるなあ、活躍してるなあと思います。この中で5000人ぐらいは永住されています。これはマニラ、私が住んでいたのはここです。後で紹介しますがこれはセブというところ。セブっていうのも直通の飛行機がありますが、リゾートで、海がきれいな、もっときれいなところはあんですけども、まあ、一般的に観光で行く

セブというのはリゾート地になります。はい、この辺はちょっと危ないです。危ないというか、宗教対立があって、ちょっとたかひがあるところですけども。こちら辺りは安全なところですよ。ざーっといきますが、上の2つは世界遺産になって、国内は時間があつたらなるべく巡りましたけども、世界遺産の地域があつたり、これは、以前スペインが統治していた時代の古い街並みが残ってるようなところですよ。ピガンというところですよ。そこの近くにある教会。ここがボホール島っていう島に、これ、山ですよ、ほんとに。チョコレートヒルズっていう、今緑ですけども、乾期になると茶色くなって、ほんとにチョコレートみたいな山が連なると、奥までざーっと同じような景色ですよ。で、これはちょっと謎らしいですけども、なかなか見れない景色を見たりとか。海はいっぱいきれいなどがあります。ダイビングも安めでいけます、できますので、まあ、フィリピンに行く方っていうのは、ダイビングに行く方っていうのも多いと思います。美しい自然もあります。

そんな中で、私が住んでいたメトロ・マニラ。これはもう、ほんとに一極集中で、首都の、首都圏というようなイメージだと思いますが、この写真は自分の住んでいたアパートの窓から写した写真ですよ。すごい高層ビルが立ち並んでいます。もうなんでも基本的にはあります。高いものからほんとに安いものまで、何でも揃います。ここに来るまでは「どんどこー？」みたいな感じで、日本ではだいたい事件が放送されて。（赴任する日本人学校が）マニラになったんですけども。私、正直まあ、ちょっと近い、比較的近いところに当たったなあと思ったのと、ちょっと危ないのかなあ、というふうに思ったりもしたんですけど、行ってみると、なかなかどうして、住みやすいところでした。危ないところ、場所をね、回避して生活すれば、十分、安全に過ごせました。ただアパートの斜向かいの玄関で射殺事件があつたりとか、子どもに「お腹すいたお腹すいた」とかって近寄られて、車に乗ってみたら、デジカメがすられていたとか、そんなのは時々あります。でもまあ、安全な、安全な……。

（会場）（笑い声）

（広富）安全な。時々不注意でちょっと、やっちゃいますけども、でも安全な。あの、でも普通に歩いたり、普通に走ったり、夜にジョギングとかもできますし、注意すれば、安全な国ですよ。はい、人口、まあこんな感じ（約1155万人）ですよ。

お金は1ペソがだいたい2円。なので、ペソで支払って、まあ、その倍の値段だなあという感覚で買っていました。これが一番よく飲んでた、中身はもうないんですけど、サンミゲルビールというので、日本のビール企業がちょっと提携してて、あのおいしいビールなんですけど。これがだいたい25ペソで買えます。だから50円ですよ。で、輸入していたビール、例えば「キリン一番搾り」とか350（ml）だったら、

コンビニだったら220とか240（円）ぐらいですかねえ。でも、輸入しているビールでさえ、日本のビールが80ペソだから160円ぐらいで輸入ビールが飲めます。つまり、税金がね、日本は高いということになります。輸入していても、日本のビールが外国で日本よりも安く飲めるというようなことで。

フィリピンらしい光景として、バス。ジブニーといいます。これはトライシクルですよ。トライシクル。これ、サイドカーみたいな感じで庶民の足になっています。これはスーパー。大きなスーパー、結構、マニラではあります。これは果物、とってもおいしいですよ。初めてここに来て思ったのが、パイナップルが本当に甘いんだなってのは思いました。缶詰以外のパイナップルってすっぱいものだと僕は思ってたんですけども、ほんとに甘いんですよ。缶詰以上に甘い。バナナも日本で食べるよりも数倍甘い感じですよ。だから果物はとってもおいしかったです。マンゴーもいっぱい食べたんですけど、突如、僕、マンゴーアレルギーだつてことがわかりました。おいしいなあ、おいしいなあ、と思つて結構食べ続けていたら、なんか顔が腫れてくるんですね。なんかただれてくるといいますか。つまりかぶれてしまつて、漆科の植物で、マンゴーというのは。合わない人は、かぶれていくということ。とっても大好きで、見ると食べたくなるんですけども、ある一定量超えるとかぶれてくるということで、ひとつ残念な思いもしたんですけども。とっても果物おいしいですよ。

これ、この写真は店の店員が、ある一定時間になったら、なんか並びだしたなあと思つたら、曲に合わせて踊りだします。店員が踊るんですよ。まあサービスの一環なんですよ。でも。まあ、そういう陽気な、曲が流れると踊るといふか、陽気なところがあります。食事ですけど、この2つ、シニガンっていう、スープなんですけどもね、すっぱいですよ。すっぱい。最初、何だこれ、と思つて。おいしくないなあ、最初は思つたんですけど、飲みつけてくるととってもおいしいですよ。コクがあつて、でもすっぱいですよ。で、いろんな鶏肉だったり、牛肉だったり、魚だったり、いろんな物を入れて食べる、地元の料理ですよ。こういうのはもうガーリック・ライスだったり、これはアドボといつてココナツツのミルクで、煮ているような、そんな料理が主流ですよ。結構おいしいですよ。

これはマニラ日本人学校ですよ。マニラ日本人学校はメトロ・マニラの、先程説明すれば良かったんですけど、ビルのたくさん建っているところ、ほんのすぐ近くに、日本人学校があつて。文教地区の一角にあります。向かいにイギリスのインターナショナルスクールがあつたりとか、海外のインターナショナルスクールとかが近くにあつたりするようなところで、日本人学校も建っています。学校の目標は、「自ら学び、優しく、賢く、遅しく、国際性豊かな子どもを育成する」。これは日本とほとんど一緒ですよ。一緒に学習をできるようにと設立された、日本人学校ですよ。児童数は、中学部も合わせて372名。教職員、教員24名。事務（9名）とか、英会話講師

(6名)、水泳講師(2名)。後で説明しますが、水泳講師も雇われていました。地域のスタッフと派遣された教員とでチームを組んでやっていました。

特徴的な学習の中で挙げるとすれば、どの学年も、週に2時間は英会話の時間がありました。日本ではそれはない、ということだと思います。で、6クラス、その学年がその時間は6つのクラスに分かれる、能力別に分かれます。だから、全校の中で3割ぐらいは現地で生活しているか、例えば、奥さんがフィリピン人で、旦那さんが日本人で、フィリピンで住んでいるような人も3割ぐらいいます。なので、英語の方がすごく日本語よりも流暢な子もいて、その子はほんとに、自分でも聞き取れないというか、すごい英語力がある子がいるので、その子は高いクラスに行ったりとか。なので6クラスに分かれて、週2時間やっていた。それと、水泳は、体育はだいたい日本でもまあ週2から3回あるんですけども、1年間、週に1回は必ず水泳でした。なので、水泳専属のコーチが2人常駐で教えていました。

現地校との交流は盛んにやっていました。私立校との交流では例えば日本の折り紙とか、飛行機飛ばしとか、剣玉とか、だるまさんころんだとか、そういう日本的なことを紹介して一緒に遊んで、で、現地の遊びなんかを紹介してもらって交流するってなことをよくしました。これは、日本人学校と現地の子どもが一緒になって遊んでいるようなところ。公立校とも交流をして、これはフィリピンダンスを教わっているようなところ。だいたい1年間(5年生の1年間の予定は)、同じです。ドッジボール大会とか、水泳大会とか。これは学習発表会、10月にあります。(11月に)縄跳び大会、運動会は1月にあります。年間(を通して)暖かいんですけど、日本でいう夏のあたりが雨季になって雨がよく降るので、逆に冬になります。

現地校の様子ですけども、もう、現地校は、すごく学校数が少なくても子どもが多いので、50人とか60人とかが1クラスに入って、それが午前中の部と午後の部と、2部制だったりとかしているような公立の学校が多かったと思います。それから、セブの補習校。セブっていうところにも補習校、毎週土曜日に集まって日本語の教育、日本の教育をしているようなところがあって、手伝いに行ったりとかもしました。

フィリピンのことをさっき紹介したので、ちょっとだいたいざっとフィリピンと日本の(学校教育の)違いということで、フィリピンは6・4・4制で、6年、4年、4年。4月からではなくて、6月から始まって3月末に終わるというような1年間。先程言った2部制、3部制、午前と午後の部。公立学校でも地域によって設備が全然違います。日本の環境はとってもしっかりしていると思います。経済格差も激しいので、公立学校では留年や中退学者が多いということです。一方で私立やインターナショナル校は(授業料などが)高いんですけども、立派な施設を持っているということです。

これ、(現地の)公立学校の体育で、なんかもう何してんの? っていうような体育ですけど、これでも目的を持っていろんな体操をしてるといような感じで、グループごとで活動していました。これはインターナショナル校のバスケットボールの授業の様子で、設備の違いが明らかです。これは、高校でドッジボールを教えました。現地の子たちはドッジボールやったことがなくて、すごく最初はどうなるかと思ったんですけど、国内ではバスケットリーグがあるぐらいの国なので、バスケットが得意でボール扱いは上手で、すごく盛り上がって、ドッジボールを教えたならやってくれました。体育の授業は、少ないです。体育、音楽、美術を合わせて、1日あたり20分ぐらいの割合しかしないということです。日本より少ない。例えばこんな、現地のフィリピンの指導要領を見ると、体育ではこんなことも書かれていました。「姿勢を重視し、生活に密着した学習内容」。例えば、犬から逃げる方法。野良犬がいっぱいいるので、それを体育として教えている。どうやって逃げるか。あと、高い物を取る方法。そういうのが、日本でいう指導要領に記述されていました。とにかく作法とか、所作みたいなのが重視されていたりとか、あとダンスに対しても時間をかけて体育の時間をやっているというようなことです。ちょっと付け加えてお話しさせていただきました。以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。

(会場)(拍手)

(4) 会場の学生からの質問とパネリストからの回答 質問①

全員の方にお聞きしたいんですが、海外日本人学校で派遣を希望するにあたって、どこに派遣されるかは先程あったようにガラガラポンだとすると、外国語やその他の準備は、何をどの程度準備なさっていたのかをお聞きしたいです。

回答(広富)

自分はまあどう転んでも、英語圏になろうが英語圏でなからうが、英語はまあ知っていた方がいいかなあと思って、例えば、当時、ノバ(英会話学校NOVA)っていうのがあったりとかしたので、まあ少しちょっとかじってみたりはしましたが、そんなにノバに行ったからといって、そう簡単にすぐにはあれだったんですけども。でもまあそういう意識で、ちょっと事前にやっとうかなあというのはありました。ただまあ、結局は行ってからでもね、なんとかなるものではありません。そんなに周到な準備をして、語学的にして、出向いたわけではないという感じです。結局、12月ぐらいに決まって、その次の4月には出て行くわけですから。そこで、英語圏なのかどうか分からないです。なかなかその準備はできないかなあ、と、語学的に。そう思います。

回答（伊藤）

はい、ほとんど一緒なんですけども。自分もまあ、申し込んだ段階で英語は勉強しとこうかなあとと思って、知り合いの人で、この鳥取大学の留学生さんに英語を毎週1回、会話をするっていうようなことをしていました。で、12月になって、中国だと聞いて「おー中国語なんて知らねえぞ」と思って、鳥取で中国語を教えてくれる教室があったので、そこで、一応習いにいったんですが、週1回なんですけど、ピンインてありますね。中国語勉強している人は知っているんですが「マアマアマアマア」ってやつ。すみません、適当で。あれをやって、あれもできずに出発、みたいな感じだったので。結局、向こうに行ってから週に1回、勉強していました。

回答（初瀬）

はい。私は英語に慣れ親しむことが高校、中学のあたりからずっとあったので、英語はまあおいといて。ドイツ語を大学で取れば良かったなあと思ったんですけども、私、中国語を取ってしまっていて。で、何をしたかという、毎朝7時からドイツ語のラジオ講座がございまして。で、あと、夜テレビでドイツ語講座をやっているのをテレビで見ました。右も左も分からない状況でしたが、1から10ぐらいまでは、わかるようになってから行きました。



質問②

日本人学校にいるメリットは何なんですか。言語の壁を避けられるということだけがメリットということではないと思うんですけど。そこには一体どんなメリットがあると思いますか。（3人に全員をお願いします。）

回答（広富）

メリットは、それは、派遣された自分のことですか。それとも、日本人学校に行く子どものことですか。

（質問者）日本人学校。全体的に。

（広富）全体。学校が。

（質問者）はい、学校です。

（広富）学校自体は、基本的にその日本人学校っていうのは、海外に日本人が行って、そこで子どもたちが、その日本と同じ教育が受けられるように設置される学校ですから、基本はまあ日本語で全部、日本の教育課程を目指してやっていることですから、世界どこで、例えば、企業の子どもさんが、働

かれても、日本の教育が受けられるという保障をするための学校だというスタンスで開設されていると思いますので、そういうメリットではないかなあというふうに思います。で、加えるならば、日本人学校はあるんだけど、地域のそのインターナショナルスクールというか、英語で学習するスタイルの学校にわざわざ通わせる日本人の子どもさんというか家庭も一部あります。それは、家庭の判断になるんじゃないかなあと思います。

回答（伊藤）

はい、同じだと思います。駐在員さんたちは、僕が出会った方はやっぱり3年ぐらいで、帰国されている方が多いなあ。だから、上海に来ました、3年ぐらい経ったら帰ります、というような方が多かったなあと思います。そうすると例えば、うちの子とかもそうなんですけど、小学校2年生で来て、2年生、3年生、4年生と過ごして、また日本の学校に帰る、というような子どもたちがたくさんいたんです。そうすると、日本の学校で勉強した、その続きが、海外出てもやっぱり同じカリキュラムで、同じ教科書で勉強できて、で、3年間なり過ごして、その後帰っても、またその続きから日本で勉強できる、っていうところが大きいメリットかなあ。まあ日本語で勉強できますし。先程、ここ（会場）に来る前に（3人のパネリストとコーディネーターで）ちょっと話してたんですが、なんかね、日本の学校に行く以上に日本の文化にこだわった授業をしています。まあ日本人だからおせちぐらいのことは知っとかなきゃいけないだろうとかね、舐揚げぐらいできるようになっとかなきゃいけないだろうとかって、ちょっとこだわってやっているので、かなり日本文化に精通して帰ってくるなあと思います。

回答（初瀬）

あとつけ加えるなら文化だけではなくて、外国で日本を感じる機会がすごく少ないので、日の丸を見ると、ああ自分は日本人だあって感じたりとか、僕、日本人で良かったなあってしみじみ思ったりとか。やっぱり日本のことを誇りに思うという子どもたち、本当に多かったように思います。うちの子も、日本、鳥取、いや智頭が大好きで帰って来ると良かったと思っています。

質問③

伊藤先生にお聞きしたいんですが、日本のメディアのニュースを見ていると、すごく中国に対してよくない影響のお話聞くんですね。中国では、起きた事件を中国人の人たちには隠しているとか。世界ではその事件に関する検索をしたら出てくるのに、中国で調べたらその事件は出てこないとか。そういうのって、でも中国人の人たちが全員そうじゃないと思うんです。だけ（だから）、実際にそのよくないことっていう

のを、どういうふうにかけているのかなっていうのをちょっと気になりましたし、逆に、じゃあ中国では日本ではあまり広められてない、日本の悪いことなんかも言われているのかなっていうのもちょっと気になったりはしてたんです。お聞きしてよろしいでしょうか。

回答 (伊藤)

はい。そうですね、わかっている範囲でしか言えないんですけども、その、情報操作の件に関しては、されてました。インターネットで、昨日まで流れてたニュースがある日突然ぶつと切られていたりとか。やはり政府が管理しているとかっていうことで。海外のページとかも、突然ぶつと切られて入れなくなったりとか、されてました。で、中国で住んでいる人たちも、だからそういう中国政府に対してかなり不信感を持ってられる人も多かったです。「なんか政府のやり方ってよくないよね」みたいなことを、今、民間にもたくさん情報が入っているので、それを受けて国民たちが判断して、「このやり方おかしいよね、情報を出さないの、おかしいよね」とか。なんかその、反日のことの「マスコミの報道の仕方もおかしいよね」みたいなことを中国の現地の方が言うておられたりとかっていうことを聞きました。あと何を言ったらいいですかね。そんな感じですが、あの、もうちょっと言いたいのはやっぱり、先程もちょっと話したんですが、行ったらやっぱり同じ人間だなあっていうのをやっぱりすごく感じて、私たちが持つてる感覚を同じように中国の方も持ってて、やっぱり、だめなものだめだと思し、ずるいことはずるいと思し。その辺の感覚はすごく一緒だなあというふうに感じて帰ってきました。

質問④

日本人学校と現地の国での交流には、具体的にどういったものがあるのですか。それと、現地の学校と交流する際に意識したり、気を付けたりしているものに、何かありましたら全員をお願いします。

回答 (広富)

はい。フィリピンでは、現地の公立学校の子どもたちは1年生から英語は必修です。ですから、小学校1年生からなので小学生でも英語が喋れますので、英語で会話して、交流を深めていくっていうのをやっています。なので、現地の学校の子は、現地のことを日本人学校の子どもたちに教えるようにする企画を立てて交流します。で、我々も現地の学校に行く時に日本のことを教えるつもりで何を伝えようかっていうことで、計画していくというような形です。



回答 (初瀬)

はい、現地理解教育っていうものを日本人学校では掲げていますので、その現地の人たちと仲良くなるという視点、あとドイツ語を1年生から勉強します。それを活用する、つまり、それは生活していく力にまっつながっていくわけなんですけれども。そういう機会を作っていくということを意識していました。日本も大事にしていました。

回答 (伊藤)

はい、向こうのね、現地のことを知る、現地のことを、文化とか、現地の言語とか知ってっていうのと、それからそれを準備するにあたって、日本の再発見というか、日本のことをより知る。なんか独楽回しの仕方を教えようとして、独楽回しのことを勉強するみたいなことをしていました。で、気をつけなければいけなかったのが、中国の現地の年度初めが9月なんです。9月スタートで夏に終わってしまうので、なんかこっちの計画がもたもたしてて、秋とかに入ってしまうと、交流する側は「年度始まったばかりでそんな交流なんかできないよ」っていうふうに言われてしまう。で、1年生どうしだったら「まだ入学したばかりで交流なんかできないよ」って言われてしまうってことがあって。なんとかその年度が終わるまでに、だから7月になるまでに交流しようかってするんだけど、そうすると今度はこっちの1年生の方が辛いみたいな、その辺の調整がちょっと難しかったかなあというのを覚えています。

(コーディネーター) 本当は最後に(パネリストの方々から)一言ずつ、と思っていたんですが、もう十分、皆さん(参加者約230名)に伝えたいことというのは3人の先生方からは伝わったと思います。それで、最後に皆さん、拍手したいと思いませんか。感謝の気持ちを込めて拍手しましょう。きょうはどうもありがとうございました。

(会場) (拍手)

(編集: 柿内真紀)

テーマ2 「学級経営の極意」

（小谷）今日はパネルディスカッションとしては2回目ですね。これから学級経営についてのパネルディスカッションを始めます。今日のパネリストの先生をご紹介します。まず、左側が山本美弥子先生です。

（山本）よろしくお願いします。

（小谷）鳥取市立の倉田小学校の先生です。学級経営、それから生活科の分野でのエキスパート教員です。次が大広晴美先生です。

（大広）よろしくお願いします。

（小谷）大広先生は鳥取市立中ノ郷中学校の先生です。大広先生は音楽のエキスパート教員です。次が横田博昭先生です。

（横田）よろしくお願いします。

（小谷）横田先生は中ノ郷小学校の先生です。体育のエキスパート教員です。初めて参加した方もあるので、エキスパート教員について説明しておきます。各県が似たような制度を作っているのですが、他の教員のモデルとなるような優れた教育実践を行っている先生をエキスパート教員として認定する鳥取県の制度です。山本先生は平成24年度から認定されています。それから、大広先生は平成26年度、今年度からの認定です。横田先生も同じく今年度からの認定です。今日は学級経営について色々な実践が聞けるものと思います。それでは先生方よろしくお願いします。

そうしますと、これからテーマとしては「学級経営の極意とは」というすごいタイトルがついていますが、基本的には日頃実践されていることをお聞きしたいと思います。最初にお一人ずつの先生から、自分がこれまで学級作りを進める上で大切にしてきたことですね、ずっと続けてきているとか、これだけは必ずしているとか、そういうことを話していただくと思います。それでは、まず、山本先生よろしくお願いします。

（1）パネリスト講演：

山本美弥子 鳥取市立倉田小学校教諭
（鳥取県エキスパート教員）

（山本）こんにちは、倉田小学校の山本と申します。ちょっと緊張しております。では、始めさせていただきます。

私は、今年度から教務のお仕事をさせていただいておりまして、学級担任というわけではないのですが、昨年度まで学級担任をしてきて、大切にしてきたことをお話させていただきます。

大切にしてきたことは3つあります。

1つ目は「あなたの存在、今ここにあなたがいるってことに価値があるのだよ。大事なのだよ。かけがえのない命を持



って生まれてきたのだよ」ということです。

2つ目は「一人じゃない、周りには同じように大事な人がいる。だから友だちとともに成長していくのだよ」ということです。

それから3つ目が「保護者との繋がり」です。まず私と子ども、保護者と私、それからいろいろな親御さんとクラスの子どもたち、それぞれを繋いでいく。そして子ども同士を繋ぐ。一人一人が安らぎと居場所のある学級をずっと目指してきました。特に最近では、同一学級の担任期間が一年という傾向があり、一年で勝負という気持ちで、子どもたちと一緒に学級を作っています。

まず、1つ目ですが、人が生まれてくる確率というのは4億分の7なのだそうなんです。それくらい生まれてきたことにすぐ価値があるので、「あなたが、今ここにいるまでに何人もの人たちの思いが繋がれているのだよ」ということや、「1つて1番元になる数なのだけど、それが手をつなげて大きな1になって、またその数が増えていってさらに大きくなって1になって、だから1つて、あなたが今ここにいるって大事なのだよ」ということを強調して、一年間繰り返して言っています。

それから、2つ目は、学びの中で子どもたちは互いに成長していくので、間違っちゃっていいんだ、失敗しちゃっていいんだ、皆で作っていけばいいんだからってことを意識づけています。一人の考えを皆で繋げていって、「分からんかったら助けて。うん、いいよいいよ、次はこうだからね」ということで、学習中、「皆で考えを作り上げる。自分たちで作る」ということを大切にしています。

3つ目は保護者との繋がりということで、「付箋大作戦」と名付けているのですが、子どもに見られる小さな変化を付箋にぱぱっとメモして連絡帳に貼るなどして、ありのままの子どもの姿をお知らせするというようなことをしています。また、一週間に一度、学年或いは学級通信を出しているのですが、子どもたちのちょっとした変化を必ず載せたり、子どもの言葉を直接載せたりするようにしています。それから、配慮を要する子どもは、最終的には、周りの子どもたちを育てることで成長していくのですが、親御さんの思いをしっかり受け止めながら、「一緒に子どもを育てていきましょう」という姿勢でその親御さんを味方につけ、繋がりを築いていくことをいろいろと考えています。付箋には、友だちを思いやる優しい発言であったり、行動であったり、また、なんか可愛いな、素敵だなと思ったりしたこととかも、全部ちょこっと書いて、ぺたっと貼るようにしています。

また、子どもたちにも毎日3文日記というのですが、「〇が3つ。何々がありました。こういうふうなことでした。その時こういうふうに思いました」みたいなことで、書くことをとても苦手としている子どももいるので、負担にならない程度に、その日の出来事というようなことで、連絡帳に書かせています。書きたい子はいっぱい書いてきます。連絡帳はお家の人が見られるという前提ですので、必ずサインをもらっています。温かい出来事とか真剣に考えたこととかがあると、親御さんもいっぱい書いてきてくださって、そこでまた、担任との交流も出来るというようなこともあります。保護者の方から心配なこととかが書かれた時には、電話で話したり、学校に直接来ていただいたりして、しっかりと向き合って話し合うようにしています。子どもが変わることで、保護者は安心されますし、信頼も得られます。また、信頼が得られると子どもたちがさらに良くなっていくと思います。

学年・学級便りは、来週の予定を入れますので、毎週出します。自分が普段子どものどういうところを見ているのかという自分自身の感性が問われることになるのだということをも自分に言い聞かせて書いています。でも、書くことがとても楽しいです。ああいうことも書きたい、こういうことも書きたいという思いの中で一番心に残ったことを書くようにしています。また、「こういうことがありました。とても悲しいです。皆で話し合いました」みたいなことも全部書きます。その学年に応じて、いいなと思うような姿、友だちと関わっていた姿などを載せるようにしています。それとあともう1つ、子どもが書いたものも載せますが子どもの様子と合わせて、全員のことが載るように、それだけは配慮しています。

学年が上がるにつれて、人との関わりとか、友だちに思いを馳せるとか、努力をしているとか、学級目標に近づくような姿を載せるようにしています。そして、最後は感謝をして終わる。というように、だいたい一年間出しております。

また、最後ですが、配慮を要する子どもがいる場合は、その子を学級の中心に据えて、その子の居心地がいい、安心できるクラスっていうのが、皆が過しやすい学級だと思っていますので、その考え方のもとに子どもたちに学級づくりに取り組みませ、「やってよかったね。やればできる自分たちってすごいな」と言えるようにしています。小さな目標を持たせて、一緒にがんばろうねというように、決めたことに対してのがんばり方やこういうふうにしたらいいよというアドバイスもしながら、やらせてみて、できたことで、「やっぱり誰々さんはすごいね」と自己肯定感を高めるようにしています。

以上大体このようなことで、子どもたちと一緒に学級を作っていくことを大切にしてきました。

(2) パネリスト講演：

横田博昭 鳥取市立中ノ郷小学校教諭
(鳥取県エキスパート教員)

(小谷) 次は、横田先生お願いします。

(横田) 鳥取市立中ノ郷小学校横田博昭と申します。最初は自己紹介ということで、1966年9月生まれの48歳になります。鳥取市気高町に住んでおります。両親、妻、3人の娘、7人家族、結構大家族かなと思います。娘は上が中学生、一



番下は小学校2年生になります。まだ小さいです。

こんな経歴といますか、平成元年に高知大学を卒業した後、当時国府町の世器小学校という小っちゃい小学校、12人の子だったんですけど、4年生担任からスタートです。講師でした。それから米子市の大きな学校に行って、高学年を担任しました。その後、末恒小学校、青谷小学校、その間ここ鳥取大学の大学院に来て勉強もしています。それから現在、中ノ郷小学校7年目になってですね、4年生を担任しております。一番最初に4年生を持って、今4年生ということで、20数年ぶりの4年生担任をやっているところです。だいたい5、6年生の担任をしてきました。

中ノ郷小学校は、こんな学校なんです。今年開校20周年を迎えました。芝生のグラウンドで、とてもよい、新しい学校です。

学級の雰囲気ってこんな感じなんですけど、これは、前任校の青谷小学校の子どもたちの様子です。机の上に辞書を置いたり本を置いたりして学びのある空間を作ろうと普段から思っています。私が大切にしていることっていうのは、主に仲間作り、続けていくこと、自尊感情の育成、システム化、それから時間を守ること、保護者との連携、もちろん、私は体育の専門ですから、体育の授業づくり、といったようなことです。

最初に仲間作りについてなんですけれども、毎日、日記を書かせます。330字(1ページ)が目標になります。学校や家庭での様子、友達とのトラブル、悩みも知る手がかりになります。毎日コメント返そうと思っていますし、もちろん作文の指導にも役立ちます。なかなか喋ってこない女の子が多いので、コミュニケーションをとる一つの手段にもなるのかなと思って、やりとりをします。もちろんどんな風にも日記を書かせたらいいかってことで、「1行目は日付だよ」とか、「何段落にするんだよ」とか、「こんな内容書いてごらん」とか指導すると、割と書きます。よくある5ミリ方眼ノート1ページに大体こんな日記を1回に書いてきます。長く書くって返事に困るんで、「大体1ページでいいですよ」と言うと、こんなふうに書いてきます。個性的な字なんですけど、「相田みつをさんの詩を読んで心が動いたよ」ということを書いてきてくれました。時間がなかったら印をポンって押すんですけど、だいたい一言書きます。

どの学年・学級を持ってても、学級全員で遊ぶ日を大体週に1回設けています。その遊びの様子を観察すると、人間関係が分かりますので、指導にも役立つかなと思います。いろいろな遊びを楽しみながら仲間作りを進めていくってことをしています。具体的にはこんな感じなんです。これは手繋ぎ鬼なんですけど、男女、女の子ばかり繋いでるんじゃないかって男女・男女みたいな感じなんです。分かると思いますが見てくださ

い。これは6年生なんですけど、こんなふうに遊ぶかなあと思っています。

続けていくことっていうことも学級経営の柱かなあと思っています。よく百人一首をやります。五色百人一首というやつなんですけど、男女の触れ合いだとか、前頭葉が活性化するだとか、どこに何があるという空間認知能力が育つとか、盛り上がりますので、学級作り役立つとか、もちろん百人一首が覚えられるとかいろいろあります。こんな風にやります。結構盛り上がります。勉強ちょっと早く終わったから5分間でやろうかとか、結構手が触れたりして、それも触れ合いかなと思ったり、それを通して会話が盛り上がりますよね。そういうことが生き生きとした学級づくりに繋がるのかなと思います。そのためにですね、百人一首を覚えなければいけませんので、帰りの会の時間を使って覚えます。こんな感じで覚えています。そうやって、卒業するまでにはほとんどの子どもが百人一首を全部覚えます。「一番、秋の田の」と言ったら全部言えます。まあ毎日するんで、こんな感じになります。

連絡帳漢字テストっていうのを、これも毎日やっております。帰りの会に五回漢字テストをするってやつです。1問2点で1回が10点、10回セットで100点になります。自己採点で隣の友だちと確認です。間違った字は5回練習するというルールでやっています。それをやるためにこういう連絡帳を使っています。その下の方に漢字テストの欄があります。左側に音読カード貼って右側が連絡帳という、こんな感じで、右の下に漢字テストの様子が分かると思うんですけど、結構重要っていうかスペースは広いです。こんな感じでやっています。毎日するので、100点満点の漢字テストやったら、大体90点以上とれます。朝の会、帰りの会ってこんな感じでやっています。その中に仕組んでしまうと、毎日ですから必ずしますよね。帰りの会では漢字テストがあったり百人一首を暗誦したりとか、そういう時間も設けています。

自尊感情の育成ということで、イベントに参加しようとか、お祭りがあるから、クラスでやってみようって持ちかけて参加したりします。参加すると、地域の方からも、すごいねすごいねって言ってもらったり、おまけに参加賞までもらったりして、子どもたちは嬉しいという一石二鳥の感じです。まあ思い出にもなりますしね。それから、近くに保育園があるので保育園との交流も総合学習の一環で行っています。まあこんな感じで子ども目線で幼児と話をしたり、お兄ちゃんお姉ちゃんって言ってもらおうと、すごい喜びます。心が温かくなって帰ってきます。こんな感じで遊んでいますね。また、近くにデイサービスの施設がありますので、そこに行って、おじいちゃんおばあちゃんと歌を歌ったり、肩たたきをしたり、百人一首の暗誦をしたりします。これも、「ありがとう」と言ってもらえて、子どもたちは喜んで帰ります。「行って良かった先生」みたいな感じです。

また、学級で一人一役っていうのを決めています。係りとは別に一人ひとりが自分の役割を持って、それを実行する。そうすると教室が動きます。さっき女の子が立ってたんですけど、次の漢字テストは何ページです。とか、例えば黒板消す係りとか、給食配る係とか、百人一首の暗誦する係とか決まっています。そうするとぐんぐん子どもたちが動きます。係りとはこれは別になります。掃除も結構徹底して教えています。手順や約束を決めて、最初はこうやってやるよ。机後ろ

に運ぶよ。最初に拭く人が先生のごみ箱のごみを捨てるんだよとか、一人が板一枚ずつ窓側から拭いていくと綺麗になるよとか、最後に箒でごみを集めるよとか、そういうルールを決めておくと、子どもたちは放っておいても動きますよね。先生は、子どもと一緒に掃除しません。子どもが見えなくなっちゃいますので、先生は子どもたちの様子を見て指導して回ります。「こうするよ」とか「いいね、上手だね」とか「頑張ってるね」とか言って回ります。これが先生の仕事なんだと思います。教室はこんな感じです。このぐらいだったら4人くらいで教室掃除いけます。トイレ掃除って大変なんですよ。でもこうやって、「掃除が終わったらトイレトペーパー三角に折るんだよって」と言うと、結構喜んでやります。「あーこれすごいね」って他の先生に言ってもらったりすると、やりがいを感じて、進んで取り組むようになります。

時間守ることも大事にしています。「子どもたちに時間守りなさい」と言って、先生が守らなかつたら、「先生が守ってないじゃん」とか言って、子どもから突っ込まれます。時間を守ることで子どもと信頼関係を築きます。「もうこれで終わりね、先生時間守るからね、休憩だよ」とか言って、で休憩時間をきちんと確保します。授業時間は45分ですが、開始2分前には子ども達は座っていて、1分前に終わっても、46分授業できますので、そういう授業を私はいつも目指しています。ですから、こうフラッシュカードっていうのがあって、1aは何mとか1haは何mとか、そんなのを言わせながら、後から入ってくる子が気まずくないという雰囲気を作ってしまうと、46分の授業ができます。こんな感じで、授業がもうスタートしているって感じになります。

保護者との連携も大事にしています。さっきの連絡帳の下の欄に家庭連絡欄というのがありますが、保護者が書いてこられるんです。それには必ずコメントを書きます。年末の最後の日になったりすると、「先生ありがとうございました」と書かれたりとか、卒業前になるといっぱい書かれます。常に保護者とやり取りをするってことを大事にしています。学級通信も出して、日記を紹介したりとか右の下は自分の子育て日記とか書いて出したりします。今頃プライバシーとかあるので、個人情報とかなかなか難しい面もありますが、そういうこともして信頼関係を築いています。「音読をしよう」と呼びかける、こういう学級通信もありかなと思っています。こまめに連絡したりとか、学級懇談会で色々話し合ったりとか、それから保護者と懇親会で喋ったりとか、そういう時間を大事にしています。

体育の話もさせてもらいたいと思います。すごい古い本なんですけれども、自分がこうやりたい授業っていうのは、精いっぱい運動させてくれる授業、それから技や力を伸ばしてくれる授業、それから友達と仲良く学習させてくれる授業、新しい発見をさせてくれる授業。これ「高田四原則」というんですけど、これをなんか自分の中では体育をする上でいつも考えて授業作りをしています。こんな感じです。授業の様子です。「やったー」「記録伸びておめでとう」と言えるような学級というか授業にしたいといつも思います。今度はこんなものもあります。こうハードルですから、遠くから飛んで近くに着地すると速いということを教え合っている場面でした。これ男女肩組んでよしやるぞみたいな、リレーの最初なんですけど、ハードルの記録会の最初にさせたり、ゲーム、パス

ケットボールの試合でもさせたり、必ずこれ円陣組まんと試合スタートさせんとか言って強制的にやらせたりします。

私の一日ってこんな感じになります。朝6時までに起きます。今朝は6時半に出勤したのではありません、普段は毎朝ラジオ体操をします。一年間やっています。毎日、外でやります。7時20分には学校に来ます。必ず教室で子どもたちを迎えます。学校で出来る仕事は学校で片付け、できれば19時には家に帰りたいなと思っています。今日もこれが終わったら帰ります。帰ったら娘と遊びます。家で出来ることは家に持って帰ります。23時までには寝ます。早ければ22時とかです。だから土日のうちに仕事をします。一週間先のことをします。教室の私の仕事ぶりってこんな感じになります。だいたい30人の学級なんですけど、朝のうちにだいたい宿題を全部パーっと見てしまいます。計算ドリルをこう出したので、全部チェックして、「線分図描いてよ」とやってもらったりとか、出来なかったら、呼んで「これしなさい」とか言ったりします。

最後ですけども、イメージとして学級というのは保護者と子どもと先生との関係で成り立っているんで、この関係が上手くいけば、だいたい良い学級が出来るかなと思って学級づくりを行っています。今まで自分がやってきたことっていうのは、同僚とか先輩から学びました。ずっと続けていきたいし、私の特技が学校の中で活かしていけたらいいなと思っています。最後に、「いつもありがとう」とか「感謝します」という言葉を私は大事にしようと思っています。以上で終わります。

(小谷) 今の発表の中に7時20分出勤というのがあったんですが、学校って、早いところは、子どもが7時30分から40分とかに登校してきます。今日みたいに雪が降ったりすると、学校の先生が遅れて行くわけにはいけないので、余計に早く出勤することになるんですね。では、今度は中学校の大広先生から話を聞きます。

(3) パネリスト講演：

大広晴美 鳥取市立中ノ郷中学校教諭
(鳥取県エキスパート教員)

(大広) 鳥取市立中ノ郷中学校の大広晴美と言います。今日は、配布した資料をもとにお話をさせてもらおうと思っています。まず、今日はこのような発言の場を与えていただきありがとうございます。今回何を話そうかと考える中で、自分の学級経営を色々振り返ることができました。これから教職を目指す皆さんへ、私が普段からこだわって大切にしていることを少しでもお伝えできたらと思います。よろしくお願いします。

まず学級経営で大切にしていることですが、ありがたいことに私は大学卒業後の講師1年目からずっと学級担任をさせていただいています。学級担任として伝えたいことはすごく沢山あるのですが、その中でもこれから教育現場に出られる皆さんへ伝えたいことを限定して7つほどお話しさせていただきます。

まず1つ目に、担任として出来ることは必ずやるというこ



とです。私が学級担任になってから毎日必ず実践していることがあります。それは、放課後の教室に行って机の整頓と教室をきれいにすることです。始めたきっかけは、先輩の話を聞いてからです。こんなことをやっている先生がいるというお話を聞いて、これなら私も出来るかもと思って続けています。朝、生徒が教室に入った時に、今日も一日がんばろうと思えるような教室環境で生徒を迎えたいと思っています。私の持論で環境は人を育てると思っていますので、この机の整頓はすごく簡単なことですが、毎日続けています。その他にも実践していることは色々ありますが、担任としての小さなこだわり、一つのことを徹底してずっとやり通すことには意味があると思っていますので、宿泊を伴う出張や研修以外の日は、約20年間毎日ずっと続けています。

2つ目に自分の得意なことと、不得意なことをきちんと把握するという事です。ちょっと恥ずかしいですが、担任として私の不得意なことこれから紹介させてもらおうと思います。

まず1点目に、生徒理解と生徒指導ということです。これは自分にとって、昔も今も変わらず今一番の課題だと思っています。実は、昔、私は一律にすごい勢いで生徒を叱って生徒指導していましたので、失敗も数多くしてきました。その当時、私はまだ20代で若かったので、本音のところを言うと生徒に舐められたくないという思いが強く、本当に厳しかったと思います。正義感を前面に出しながら正論を述べてきましたが、上手くいきませんでした。もちろんこの厳しい指導は、多くの生徒にとっては有効な手立てでしたが、一番問題を抱えている生徒については、全く上手くいきませんでした。今になって振り返ってみると、その当時、自分に一番足りなかったのは、生徒指導ではなく生徒理解だったと思います。生徒は実に様々な環境で育ち成長しています。同じ指導でもすぐに心に入る生徒と、反発してなかなか受け入れられない生徒がいます。今では、生徒の家庭環境や生育歴、それから小学校の時の様子など、様々な状況を理解した上で、その子に一番合った、今一番合った言葉を選んで生徒指導するように心がけています。この加減が一番難しく、自分でも本当に今の指導は、これで良かったんだろうかって悩む毎日です。

2点目に苦手なこととして、笑顔で生徒と接することです。今日は皆さんがすごく一生懸命きちんと話を聴いてくださっているので、私も笑顔でいられるんですけども、担任として生徒の目の前に立った時には、やっぱりどうしてもきちんとさせたいという担任としての責任感がすごく強くなってしまって、真剣な表情というか、むしろ厳しい顔で生徒に接することが多いです。もちろんそういうきりっとした場面も必

要なんですけれども、今ではできるだけこやかに、特に、朝学活では生徒が今日も一日頑張ろうと思えるように、笑顔で話すことを心がけています。このように思うようになったきっかけは、こんな話を聞いてからです。子どもたちは「どんなお母さんが好き」って聞かれて、どうやって答えると思いますか。皆さんはどんなお母さんが好きですか。生徒が一番にこのように言ったそうです。「いつも笑顔でここにしているお母さんが好きだ」って。私はショックでした。自分に一番足りなかったことだから。学校の中で、担任の先生は本当に親のような存在で、教室に居るだけで生徒は安心するって言われています。だから担任が出張でいない時に限って不思議と色々な問題が起こります。だから今日も実はちょっと心配なんですけれども。そこは生徒には言ってお出で来たんですけども。担任としていつでも笑顔でここに生徒の話の聴いたり、それからその場に居るだけで生徒が安心できたりするような、そんな親のような存在でありたいなって、いつもそう思っています。

3点目に苦手だったこととして、褒めて伸ばす指導です。とても恥ずかしい話ですが、私は昔すごく理想が高かったです。今でもちょっとそういうところあるんですけど、昔はそれが当たり前だと思っていて、例えば生徒が頑張る姿、掃除を一生懸命やる姿を見ていても、まあ自分もやってきたしこんなことは中学生として当然だろうって、内心思っていました。でも、この私の考え方が生徒を褒める機会を無くし、生徒の承認感、認められ感を下げているのではないかということに気づいて、深く反省しました。ですので、今は自分の学級経営の理想と目の前の生徒との現実をしっかりと把握して、褒めて伸ばす指導を一番大切にしています。たとえば理想がこの100の位置にあって、今、生徒の目の前現実が20だったとしても、20から21に上がったなら成長ですよ。そのプラス1のところを褒めるように、認めるようにしています。また毎日の生活の中で、ちょっとした頑張りや良かった行動を見逃さずに、すかさずにその場で褒めることを意識して心がけています。また問題行動を抱えた生徒に共通して言えることは、皆、自己肯定感が低いということです。「自分には良いところがない、自分は駄目な人間だ」って、必ず同じことを言います。褒められた経験や優しくされた経験がない、いわゆる愛情不足の生徒が問題行動を起こすことが多いので、そのことを意識しながら一生懸命小さな良いところを見つけ、それを言い続けるように努力しています。

それから、そこに書きませんでした。私の苦手なことの4点目は、暴れる生徒の指導です。私は女性なので、どうしても男子生徒の力には勝てません。昨日も生徒と腕相撲をしましたが、ことごとく男子には負けました。今までたくさん男性の先生の力をお借りしてきました。ちなみに、現在、中ノ郷中学校ではそんな暴れる生徒はいません。全部過去の話です。

3つ目ですけれども、身近の大人のモデルであることを自分自身が自覚するという事です。生徒は親や教員など身近な大人をよく見えています。私も中学生の頃、学校の先生の言動をよく見ていました。だからこそ生徒に伝えたことは、必ず自分が守って実践するようにしています。そこに3点書いています。まず1つ目、時間を守るということで、生徒は2分前には着席していますので、自分も5分前には必ず教室に

いるように努めています。2点目の掃除ですけれども、私は掃除好きっていうこともあるので、生徒と一緒に掃除をしています。自ら掃除する姿を通して生徒に掃除することの大切さを伝えたいと思っています。3点目に、職員室の机上整理と提出物です。いつも生徒にロッカーや机の整頓をすることや、宿題を期限までに出すことを言い続けている教員だからこそ自分が率先して職員室の机上整理や提出物を守りたいと思っています。全てにおいて言葉以上に行動で伝えることの出来る教師でありたいと思っています。

4つ目は、先輩から学ぶということです。職場には優れた指導力を持った先生方が沢山いらっしゃいます。特に中ノ郷中学校の先生方は本当にすごいです。今日も「井上先生！」「来られてますよね」、井上先生がいらっしゃるんですけども、わざわざ今日のために来てくださっています。真面目で誠実で一生懸命なバスケットボールの専門の先生です。井上先生はかなり年下の先生なんですけれども、私は先生から学ぶことが本当に沢山あります。私の経験上、20代の頃に勉強するってことがものすごく大切です。今のうちに、この20代のうちに多くの先生方に出会い、授業を見せていただいたり、学級経営のお話を沢山聴いたりすることが、後の大きな財産になります。先輩方の優れた実践の中で、まずは、自分に出来ることから一つずつ真似をして、そこから自己流のやり方を見つけていってください。学ぶことの第一ステップは真似ることだと思っています。

5つ目に職員間の連携です。中学校教師という仕事は教科の授業を行い、自分の学級を経営し、自分の部活動を指導するという専門性の高い職業です。だからこそ独りよがりの見方や考え方に陥る危険性を持っています。そこで絶対に欠かさないのが職員間の連携です。常に生徒の様子について情報交換を行うことは生徒指導・生徒理解にも繋がります。また、中学校で生徒指導をする際、担任だけがするのではなく部活顧問の先生や教科担当の先生に言ってもらった方が効果がある場合もあります。皆さんもそういう経験があるのではないのでしょうか。このように多くの先生方に関わってもらうことで、クラスの生徒が成長するので、学級経営にも大きく役立っています。

6つ目に仕事のバランスを大切にすることです。実際に教職に就くとよく分かりますが、教師の仕事は本当に沢山あります。これは私のこだわりなんですけれども、教師の仕事は学級担任業務だけ優れていても意味がないと思います。教師の仕事は学級担任であったり教科指導であったり、さらには、校務分掌、部活指導など様々な仕事があります。私は、今1年2組の担任をして、音楽を教えて、それから生徒会執行部の主査をして、吹奏楽顧問を担当していますが、それぞれのバランスを考えながら、どれも同じように仕事をしていきたいと考えています。生徒に部活と勉強の両立をさせたいと言っているように、自分自身もこの4つを両立をしていきたいと思っています。本気でこの4つをとことんやろうと思ったら、24時間じゃ全く足りないのが現実です。

7つ目、最後です。教師の人間性ということですが、学級でも授業でも部活でも、最後はこれが一番大切だと思います。私は人は人との出会いによって大きく成長すると信じています。自分も今までそのような出会いを学生時代に数多く、そして教員になってからも多くの先生方に出会って成長してき

ました。だからこそクラス担任、教科担任、部活顧問として生徒の人間性を育てていきたいと思っています。私もこの職業を通して人として成長し続けられる人間でありたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

(小谷) 今3人の先生方から、学級経営のことを中心にしながら教師としての在り方とか具体的な教師の仕事について話をさせていただきました。今、3人の先生方の話を聞いた段階で、少しこんなことを聞いてみたいということがあれば、どうでしょうか。せっかくの機会ですからね。

(小池) 地域教育2年の小池です。今日はお話ありがとうございました。横田さんに 質問があります。お話を聞いていく中で一人一役の当番活動っていうのがとても参考になりました。やっぱり、その自分が担当していない時間がなくて、一人ひとりがちゃんと役割を持って日々の生活を送るっていうことがとても大切なんだっていうふうに思います。ただ、ちょっと気になったところが数点あるので質問させていただきます。話の中で休憩時間の保障という話をされていたんですけども、その後に2分前には既に授業が始まっている状態になっているというのが気になりました。その中で、ちょっと言葉遣いの違いなのかもしれませんが、そこでなんか危機感を募らせるだとか強制とかやらせるっていう言葉が発表の中で多く出てきました。そこが、教育学を勉強している僕らにとって気になるところだったので、それは生徒が自発的にそうしたいなと思っているのか、それともやっぱりどうしても強制的になりがちなのか、そのところは横田さんのクラスではどういうふうになっているのか聞きたいと思い質問させていただきました。何かコメントがあればよろしくお願いします。

(横田) もちろん休憩時間は確保してあるので、まあ集まって来たらちょっと早めでも始めて、ちょっと早めに終わるっていう気持ちです。実際には47分になったり48分になったりなんてことはしません。もちろん45分きっちり授業するんですけど、自分の気持ちの中で「ちょっと早めに始めて、ちょっとで早めに終わろうね」という心のゆとりがあるといいのかなという感じです。逆に「遅れてもいいや」と思うと、どんどん子ども達が遅れてきてしまいがちですので、きちっと時間通り始まって、もしかしたらちょっと早めに終わって休憩時間長くしてあげるよとかね。そういう時間もあってもいいのかなと思います。長いって言ってもそんな1分2分のことなんですけれども。それから、させるというか、「させてやりたいな」という気持ちで子どもに接しています。子どもたちも決して先生にさせられているっていう気持ちじゃないんじゃないかな。「なんかやっていて楽しいな」という気持ちを感じてくれるんじゃないかなと思っています。よろしいでしょうか。

(小谷) 今、お話があったんですけど、学校って、時間守るといのは結構大事なポイントで、小池さんも休憩時間が短くなるってどうなんかってこともあったと思うんですけども、確かに休憩時間はしっかりとらせてやりたい。どちらかと言えば、先生が授業時間を延ばすことが多い傾向があるのでね、

早目々にという気持ちを持つことは大事だと思います。

それから、確かに強制ということは気になるんですけど、特に小学生は形から入って形から抜け出すという部分もあるので、形が来ると、今度は形から抜け出して、自分たちで自由に動き出すので、その過程でそういうこともあるのかなということも感じました。はい、質問ありがとうございました。

今、三人の先生方にご自分の取り組みを発表していただいて、自尊感情のこととか保護者との連携とか、大事なポイント、共通するポイントがいくつか出てきました。この後、先ほども少し出てきたのですが、児童・生徒理解についてうかがっていききたいと思います。

最近気になることで、先生が子どもの気持ちをきちんと理解できているのだろうか、先生が把握している子どもの気持ちと子ども自身の思いにずれがあるのではないかという意見を聞くことが結構あります。これから少しですね、子どもの気持ちを理解することの大切さも含めて、自分はこんなふうにして子どもの気持ちを理解して、それを尊重しているのだというところを聞かせていただこうと思います。山本先生どうですか。



(山本) そうですね。本当に聴く、とにかく子どもの思いを聴くということかな。なんか顔色が悪いとか、声の調子がおかしいとか、今まで友だちと仲が良かったのにちょっと離れたとか、おかしいなっていう点は必ず身体や行動に現れてくるので、そこで「どうしたの」って聴く。朝から機嫌が悪かったり、友達に何か凄いや言葉遣いをしたり、机を蹴ったりするなどの行動を見つければ、傍に行って「何かあったの」って聴く。自分の気持ちを押し付けるとかそういうのではなくて、今の気持ちを聴くことかなって思います。今は、子どもでも、身体にさわっちゃったら問題になることもありますが、頭をなでたり肩に手を置いたり、大きくなってもしっかり肩に手を置いたり、背中をなでたり、「やるなあ」って言ってタッチしたりして、スキンシップを図りながら子どもたちの思いをしっかりとかみ取りようにしています。資料に大きな目、大きな耳、それから大きな手、小さな口と載せています。もし悪いことがあれば、その人が悪いというよりも、したことが悪いので、何でそういうふうにしちゃったのかなっていうことをじっくり、だから大きな耳で聴くようにしています。良いことは、囁くように耳元に「すっごいな」とかって言うのととても喜びます。その行動の裏には何か必ずあるっていう目で、見たり聴いたりするようにしています。

（小谷）横田先生どうですか。

（横田）子どもたちは「先生何でだ」とか「ひいきじゃないか」とか、勝手に決めて、よく不満を言います。「何でそう思うの」と、やっぱり聴いてやります。「先生はこう思うんだけどどう」とか言って、子どもとやりとりをしながら気持ちをほぐしていきます。「じゃあこれ納得できたの」とか「まだ不満に思ってる」とか聴いてやるのが基本かなと思っています。それから私にとって女の子ってなかなか難しくって、言ってこないことが多いので、さっきの日記じゃないですけど、日記のコメントの中に、「最近ちょっと表情が暗いんだけどなんかかない」とか「先生に相談してくれない」とか「大丈夫？」とか書いてやると、日記に書いてきてくれたりします。おとなしい子は会話にならなかつたりするんですけど、そういうことでやり取りが出来るっていう場合もたまにあつたりします。それからさっきもあつたように、今頃やんちゃな子どもが多いんですけども、何かしてくれた時に「ありがとう」とい言葉を常にかけるようにすると、割と心を開いてくれる子はいるかなって思います。「先生字が違つると」とか言ってくれたら、「ありがとうね。よく気づいてくれたね」とか、よくそんな会話もしていきます。

（小谷）大広先生、中学校はどうでしょうか。

（大広）そこに3点書かせてもらってますけれども、まず生徒と関わる時間、それから生徒の言動を観察する時間を大切にしています。小学校と違って、中学校の担任は生徒と関わる時間が絶対的に少ないです。だから、朝の時間や給食時間、掃除や終学活の短い時間を大切に生徒と関わったり、よく観察したりすることで生徒理解に努めています。さっきは腕相撲大会の話をしましたけれども、最近、ストーブの周りに皆で集まってトークをしたりしています。でも毎日そうかという、実はそうではなくって、今日なんかは小学校の先生が来られて授業を見ていただいたりだとか、それから生徒会執行部の集まりがあつたり、実際昼休憩にずっとその会話が出来るわけではないんですけども、あー今日は何もないうちに生徒と関わる、本当に短い時間なんですけれども、何気ない会話を大切にしています。また限られた時間を使って、なるべく沢山の生徒にプラスの声かけをするようにしています。例えば髪切った生徒には「髪切って良くなったね。さっぱりしたね」とか、昨日伝えたのは、「〇〇先生がこんなこと言つたで。褒めとられたで」って、直接言うんじゃないで、回り回って言われた方がうれしい場合もあるので、そうやって生徒に声をかけることで、「ああいつも自分は見てもらってるんだ」というメッセージを伝えたいと思っています。

あと2点目に、生活ノートっていうのは、小学校でいう連絡帳みたいなものです。明日の予定や今日一日の日記を書いたりするんですけども、私のクラスは32人で、本当は毎日32人全員と会話がしたいんですけども、ちょっとそれは時間的に厳しいし、実際出来たことはありません。だからこそ生活ノートを通して、毎日会話、日記を通してなんですけれどもね、心の交流に努めています。自分が小学校3年生だった頃に、担任の先生がものすごく沢山赤でコメントを書いて

くださったんです。それが褒めたり励ましたりするコメントで、私はいつも放課後にその連絡帳を開けるのが楽しみだったのを今でもよく覚えています。だから自分の経験から担任のコメントも、例えば生徒の内容に共感したりだとか、それからどんな小さなことでもとにかく褒めたりするようにはしています。

3点目に普通の生徒と書いていますが、正直リーダー性のある生徒や逆に問題を抱えた生徒については必然的に担任の声かけが多くなります。「今日何時に来たか？」とか「昨日はどうだった？」「何時に寝た？」とか「あれやつといてね。」とか色んな声かけがあるんですけども、だから意識的に気をつけているのが、あまり問題を起こさない普通の生徒です。私は時々、朝の15分間の学びの時間という勉強時間があるんですけども、その時に一人一人の顔を見て、この最近声をかけていない、この最近喋っていない生徒がいいるかどうかというような確認をしたりしています。その他にも色々あるんですけども、以上3点です。

（小谷）今、聴くこと、という話があつて、聴くというのは確かに大事で、私なんかも現職教員のときに個人面談したりしてですね、子どもの話をしっかり聴こうと思うんだけど、結果的に見ると7：3か6：4くらいで私の方がよく喋っているということがよくありました。聴くということについて、今、大事なことがたくさん話されたんですけども、プラスの声かけとか、目立たない子どもへの意識的な声かけなど、大広先生が言われたように、子どもに「いつも見られている」「気にかけてもらっている」という思いがあると、非常に変わってくると思います。今、お話を聞かせていただきながら大事なことだなと思いました。

日記や生活ノートの話も出たのですが、これらの中にも結構子どもの本音が語られることがあると思います。横田先生さっき日記のことふれておられましたが、横田先生の場合、結構日記から色んな事を発見したつということがあるんですか。

（横田）やっぱり家庭の様子がわかりますね。どんな家庭か、何時に起きるとか、何時に寝ているとか、誰がご飯作ってるとか、割とお父さんが積極的にね、家事に関わっておられるんだとか、すごいお母さんのことを尊敬する子なんだとか、そうすると、普段の会話も弾んできますね。たまに「こんなこと悩んでいるんだけど」って書いてきたりする子もいます。そういう時はちょっと呼んで話を聴いたりすることもあります。

（小谷）中学校の生活ノートなんかも、そういう家庭の様子がわかったりということはあるんですか、あんまりないですかさすがに。

（大広）生徒によります。家のことを書く生徒もあるし、学校で一番心に残った授業とか、友達との関わりや部活動の様子など、本当に色々です。

（小谷）最初の発表にもあつたように、保護者との関係は学

級づくりの上で結構大事になってきます。生活ノートとか日記とかが、いろいろな面で参考になることもあるようですね。例えば、日記から子ども同士の関係で気なることが発覚したというような経験がありますでしょうか。

(山本) 私は、家庭でのことはあまり日記には書かせないようになっています。以前、アンケートで「学級のこと、友達のこと、悩んでいることはないか」というような調査がありました。その時に、ある子どもが、「誰々ちゃんに鉛筆で刺されたとか」「ちょっと嫌なことがある」とか、直接周囲に言えないことを、そういうふうを書いてきたってということがあったので、関係する人を呼んで、いろいろな話を聞くというようなことがありました。

(小谷) 日々忙しい中であっても、日記とか生活ノートは、きちんと目を通さないといけませんね。特に小学生は、朝のうちに目を通しておかないと、大事な連絡を見落とすこともありますのでね。

次に、人間関係作りについて話を進めたいと思います。子どもと先生との信頼関係については先ほど伺いましたので、子ども同士の人間関係ですね、先ほども話は出ていたのですが、それを深める感じでお話していただきたいと思います。大広先生、お願いします。

(大広) 資料に書いているんですけども、この1、2、3点は教師サイドでのお話です。4点目の子ども同士を繋ぐところで、私は意図的に関わりあうことのできる学級活動を定期的に仕組んでいます。これは講演会で聞いたんですけども、昔に比べて人と関わるのが苦手、本当は関わりたんですけどね、関わり方が分からなくて苦手、という生徒が増えてきたそうです。この理由は核家族化や一人っ子、それから遊びの変化によるものだと言われています。例えば昔は近所の子ども同士や兄弟でやっていた外での集団遊びっていうのも、今はパソコンだったり、ゲームだったりの普及で一人遊びが増えているそうです。だから、昔は集団遊びを通して自然にできていた上下関係、横同士、友達との関わりも、今は教師が様々な活動を通して、意図的に仕組む必要がある時代なんだそうです。そこで、その講演会の時に、色々な活動方法を紹介していただいたんですけども、2枚目に載せているサイコロトークであるとか、3枚目ですげごめんなさい、インタビュー活動とか、そういう活動を通して色々な友達との繋がりを作るようにしています。で、生徒たちはすごく私の想像以上に喜んでこのような活動を楽しんでいます。またやりたいっていう生徒もあります。本来こういう活動をしなくても、自然に自分たちで繋がり合うことのできる集団が出来たらいいんですけども、今はちょっと意図的に、そして定期的に、このような活動をやっています。

(小谷) 山本先生どうでしょう。

(山本) そうですね。やっぱり一番最初に学級開きをする時に、命のこととか友達のこととかっていうようなことも言うんですけど、学級目標を決める際に、親の願いとか教師の願

いとかを交えながら、自分達はじゃあ、自分たちのクラスをどうしていくんだみたいなことを、全員で話すっていうようなことから始めています。原則としてなんですけど、道徳と学級活動は全員でということを進めています。道徳は「自分の思い、どんなことを言ってもいいんだよ。思ったことはそのまま口にしよう」、学級活動は「皆のことを決める時間、大事な時間だから、この時は絶対とにかく発表ね」というようなことを言っています。

普段も全員が発表して考えを作り上げるというようにしています。だから、学級目標を皆で決めたら、自分たちで決めたことは本当に守ろうっていうふうに一生涯懸命になっていくっていうところがあって、子どもたち同士で必ず声を掛け合って、一緒に良くなっていくという雰囲気になっていきます。係り活動とかも、クラスの為になること、皆が楽しく出来ることは何かということを集まった子どもたちで遊びの係ができたとか、ニュース係で学級のちょっとしたこと、皆が気のつかない、そんなことしたのみたいな出来事とかを見つけて、帰りの会で発表したり書いてくれたりします。私がいつのまにか時間にちょっと遅れちゃったなと思ったら、もう学級会が始まっていて、「先生、このことについてちょっと今問題だなと思っているので、全員で話し合っています」とかっていうような感じです。普段の生活の中で問題を見つけて、これを皆で考えようよというように、ちょっとした時間を見つけて話し合う、そういうことを大事にしていると、子どもたちの方から動いてくれるかなって思います。

(小谷) 横田先生、人間関係づくりを進める上で、何かに向かって学級が一致団結して盛り上がっていくというのも大事だと思うんですけど、そういう例が何かありますかでしょうか。

(横田) まあ、さっきの紹介の中でもあった、全員遊びをするだとか、百人一首で盛り上がるとか、イベントに参加して盛り上がるかというようなこともあります。例えば、地域の夏祭りで出るぞって言って、それに向けて練習を積み重ねていく中で一致団結して盛り上がって行きます。その時はよさこいソーランをやったんですけど、参加賞をもらったら、こんなことをやろうかっていうのも盛り上がります。そういう大きなこともあれば、割と小さく、ペア学習といって、席の隣同士でお互いに点検したり確認したり、じゃんけんをして何かをしたりして、そういうところから始まったり、一つのグループの中で作り上げたり、例えば作品を作っていくとか、そういうことも人間関係作りには役立つんじゃないかなと思います。それから、クラスの中に物があると、それを通して関係が広がっていく場合もあったりして、許されるのであれば百人一首をこう置いておいても良いですし、トランプが一個あっても、子どもはそれを通して繋がって行って、女の子ばかりじゃなくて男の子も入って始めたりとか、そういう場合もあったりします。今は教室で風船を与えていて、暴れるよりは風船パレーみたいな感じで、そういうこともあったりします。

（小谷）まだまだ沢山あると思うんですけど、子どもたちが学級で、安心して生活出来たり、自分が出せたりっていうことはとっても大事なことで、人間関係というのは一つのポイントになると思います。もう一つはルール作りということで、これも大事なポイントだと思うのですが、少しルール作りのことを伺っていききたいと思います。大広先生、4月のルール作りの徹底ということで、資料に「学級経営は最初の3日で決まる」と書いてあるのですが、学級経営力を高める3・7・30の法則ということを言っている人もあります。大広先生、ルール作りについて、少しお話をお願いします。

（大広）私は別に全然完璧に出来ているわけではないのですが、どの本に4月がとっても大切で、4月の中でも最初の3日が特に大切だと言われています。もちろん3日間だけで1年間が決まるわけではないのですが、この言葉は、それだけ4月の学級開きがいかに大切かということ伝えていていると思います。生徒も4月の始業式の日には去年までは〇〇だったけど、例えば宿題出さなかったけどとか遅刻が多かったけど、今年こそは、この4月からは頑張るぞっていう心機一転新たな気持ちでプラスのイメージで学校に登校してきています。生徒のやる気が一番高まっている最初の3日間だと思うので、その間に担任の思いをがっちり伝えて、クラスの雰囲気作りやルール作りをすることが大切です。私はすごく細かく生徒にいろいろと言います、だから、正直、4月の最初の3日間とか一週間は緊張の連続です。

（小谷）横田先生どうでしょうか。ルール作りについて。

（横田）私も結構細かいルールを決めています。例えば、子どもたちに、朝来たら必ず前のドアから教室に入るんだよって言います。そのルールを子どもに押し付けるのではなくて、自分の思いを語ります。「皆に登校する姿が見たいんだよ」とか、「表情も分かるでしょ」とか、「皆どう、前から入ってきてくれる」とか話したら、「いいよ」と言うから、必ず前のドアから入ってくるとか。宿題出す時も「必ず同じ向きで出してね。そうするとチェックし易いでしょ。先生助かるんだよ。どう」とか言って、一つずつ本当に丁寧に丁寧にルール作りをしていきます。それって、私にとっても心地いいし、子どもにとっても居心地がよくなるということにつながります。お互いが理解し合って作ったルールだよっていう安心感も生まれるんじゃないかな。先生がこう一方的に押し付けたルールではなくって、お互いで考えたルールだから守っていいこうねっていうふうなこともできるかなって思います。

（小谷）山本先生どうでしょうか。

（山本）学級目標とは別に、本当に普通の生活の細かいルールというのは、やっぱり最初にこうするんだよっていうふう徹底することが大事だと思います。だから、引き出しとか、ロッカーの物の置き方であるとか、掃除の仕方、給食の準備とかっていうのは、全部写真に撮ってこういう風に朝来たら宿題並べてねって、もちろん入れる物も用意しておくんですけども、そういう写真を撮っておいて、それをしばらくの間、黒板に貼っておいて、自分でチェック出来るようにして

います。特に給食の準備や配膳、掃除の仕方とかは、最初にしています。

ルールってというのは、皆が一緒にいる所だから、お互いが気持よく生活するためにあるものなんだよってということで、何でこうするのかっていう理由については、皆で考えるようにしています。1年生でも、すぐばつと何処にあるか分かる便利とか、並べて置くとかと人が通る時にひっかからなくて済むからとか気がつくことができるので、こうだよということで教えるんだけど、理由は考えさせるようにしています。

私は普段の毎時間の授業こそが人間作りだと思っています。友だちを大事にするために、相手に体を向けて、その顔を見て話を聞くとか、礼をする時には、相手の目を見てお辞儀をした後に、もう一回目を合わせて声をかけるとか。高学年は受け持った最初の頃には、大きな声が出なくて困ることがあるんですけど、自分の思いがあって喋っているのだから、相手に届くような、それなりの声を出そうよ、また、しっかりと聴こうよってなことで励ましたりします。最初に学習は作るものだって言ったんですけど、何かを学習する時には、この学習ではこういう力がつくのだけれども、そのためには、どんなことをしていったらいいかということで、学習計画と一緒に立てる中で、めあてについて考えたり、その達成方法について話し合ったりします。黒板に自分たちの考えとか、友だちと一緒に学習した跡が残ったりすると、「ああいい学習したね。もっとしたいな」とか「誰さんの考えってすごい、あんな考え思いつかなかった」とかいう声が聞かれ、学習意欲が高まり、お互いを認めるようになります。1日1日とか、1時間1時間の授業とかを大事にしていくと、このような授業ができるよって思っています。

（小谷）細かいルールは、子どもを縛るものと思う人もあるかもしれませんが、そのルールがあって、子どもが、自分たちで自主的に行動できるという面もあるので、そのあたりルールの考え方を子どもたちにしっかりと徹底させていくことが大事なのかなと思いました。それでは、最後に、学級経営と関わってもいいですし関わらなくてもいいので、これから教員を目指す人に一言ずつ思いを話していただけますでしょうか。じゃあ山本先生からよろしくをお願いします。

（山本）資料に載せているんですけど、自分にも言い聞かせながら書きました。人としてずっとそれこそ命が果てるまで成長し続けたいな、素敵で魅力のある人でい続けたいなと思います。そのために器をこう上向きにして、その器もどんどんどんどん大きくして行って、色んな人からの言葉をいただいたりとか、それに対して感謝の気持ちを思ったりとかしながら、自分磨きをしていていただきたいなと思います。それから、そこにね、教員を目指す人にお勧めしたい本、森信三さんの本を紹介しています。とっても良かったので、読んでみてください。

子どもたちというのは、誰もが、良くなりたいたいという気持ちを持っていて、必ず良いところ、その子なりの素敵な面がいっぱいあります。隠れて見えないだけで、だから、それを見て欲しいなと思います。これからの未来を創造していく大事な子どもたちです、大事に育てていきたいですし、そ

のためには自分磨きも一緒にしていきたいと思っています。

(小谷) 大広先生、お願いします。

(大広) 資料の最後に書いたんですけども、授業の大切さです。授業で勝負できる教師であって欲しいと、自分自身もそういう教師でありたいなと思っています。そこに1~8までポイントを書きましたが、今大学生の皆さんにとって、意味が分かることと意味が分からないことがあると思います。教員に就かれて何十年か後に、是非もう一回この試料を見てください。その時には、分かることがいっぱいあると思います。実は、私もこの冬にあることで、自分が大学生時代の教育実習ノートを見ないといけない機会があつて、読み返してみました。その時に先生の言われていたことが、今はすごくよくわかるんです。当時、私が21や22歳の時はどこまで分かってたんだろうなつてすごく反省しました。何年か後に、何十年後にこの資料を見ていただけたら幸いです。それから大切にしている2つの詩がありますので、それも私が教員になってからずっと大切にしている詩ですので、またこれも何年か後に見てもらえたら嬉しいです。同じ職場で働くことを楽しみにしています。以上です。

(小谷) 横田先生、お願いします。

(横田) 一つの学校の中には沢山の先生方がいらっしゃいます。私は体育が得意なので、その体育で学校の中で生きる道を見つけていくというか、出来ることをしようと思って、他の先生方の苦手なこともやっつけていこうという気持ちでいます。逆に、私は例えば音楽が苦手で、26年間教員やっているんですけど、一回も音楽の教科を教えていません。どなたかの先生にその授業を持ってもらっているんです。だから、苦手なことがあっても、学校の中では自分の得意なことを活かしていけば頑張れるし、学校という組織が上手く機能するんじゃないかなと思っています。もう一つ得意なことは早起きなので、一番早く学校に行つて、日直の先生がすべき仕事の一つである鍵開けをすとかします。そうすると、他の先生が花を持ってきてくれたりしてくれます。学校の中で、そういうやりとりが出来ると、働くのも楽しくなるんじゃないかというふうに思います。以上です。

(小谷) 3人の先生方、お一人ずつがもっともつと話す内容をお持ちなわけですが、今日はこういう内容で、パネルの形でお話を聞かせていただきました。それぞれの先生方が自分の持ち味を活かしながら、いろいろなことに取り組んでおられました。お話を聞かせていただきながら、皆さんも安心したり、もっと頑張らなければと思ったことと思います。今後の参考にさせていただけたらと思います。

最後に先生方に拍手をして終わります。ありがとうございました。

(編集：小谷健一)



